

日本日記

一九三九年から一九四三年

ローランド・ハーカー著

JAPAN DIARY

1939-1943

Rowland Harker

EDITED 1990

日本日記

JAPAN DIARY

一九三九年から一九四三年

1939-1943

ローランド・ハーカー

Rowland Harker.

一九四〇年編集

EDITED 1990

翻訳 (Translated by)

宮崎 佳子 (Miyazaki Yoshiko)

岡 順子 (Oka Junko)

岡 淳 (Oka Jun)

林 花織 (Hayashi Kaori)

林 真二 (Hayashi Shinji)

ウォーラー・神部ちづ子 (Waller Kanbe Chizuko)

波多野 一恵 (Hatanô Kazue)

波多野 三郎 (Hatanô Saburo)

一九三九年二月十二日

はじめに

一九三九年三月。私はカリフォルニアの我が家を離れ、二年間の英語教師の任務を果たすため日本に向かった。だがその時には、五〇年たった今も日本で英語教師をする事になるとは夢にも思っていなかった。五〇年といってもその間には戦争もあり、日本に常時居たわけでもない。だが、若者の冒険心から初めたことが一生の仕事となり、日本の劇的な歴史の変遷を目撃することとなった。

初めて来日したときに見た日本は軍国主義の国で、軍備を拡大していた。太平洋戦争が勃発してから二年間は、収容所の中から戦争の推移を見守ることとなった。そして一九四六年に再度来日してからは、完全な廃墟の中から驚異的なエネルギーで立ち直る日本を目撃した。それから日本は経済大国へと発展したが、その発展過程においては、一九三九年当時の日本と似た雰囲気が残っていると感じる。

五〇年たった今、私は日本の最初の印象、思いがけなかった経験、そして最初の滞在中に徐々に深まっていた日本の理解に関して記録を残したいと考えた。最初の日本滞在は四年と六ヶ月に渡り、その中には二年間の収容所生活も含まれている。

この日記は、まだ私の記憶も新鮮であった一九四三年に書いた記録に基づいている。その年の終りに、私は捕虜交換船に乗船してアメリカに向かったのだ。この船は横浜、神戸、上海、香港、フィリピン、サイゴン、ゴア、ポート・エリザベス、リオデジャネイロを経由してニューヨークに到着した。船に乗っていたのは一週間と二日であったが、他にすることもなく、記録を執筆する十分な時間があったのだ。

(翻訳: 波多野三郎)

日本上陸

一九三九年三月に乗った船は永川丸であった。この船は戦争で唯一残った日本の客船であり、現在は横浜に停泊されユースホステルとして使われている。当時、日本とアメリカの関係が次第に悪くなっていったため、日本への旅行者は減り、船

にはほんの少しの乗客しかいなかった。私の両親は戦争が起るのを恐れ、長い間会えなくなるかもしれないと、私が日本へ出発するのを大変に嫌がった。乗客はファーストクラスに七人と私たちセカンドクラスに二〇人だけだった。私は東京のミッションスクールである青山学院に英語の教師として招かれ、日本に向かったのだ。

水川丸は一九三九年三月六日にシアトルを出港した。翌日バンクーバーに数時間立ち寄り、午後、横浜に向けて出港した。バンクーバーからファン・デ・フカ海峡を通過して太平洋に出るまではすばらしい旅であった。雪でおおわれた壮大なブリティッシュコロンビアの山々が夕陽に反射し暗くなるまで見えていた。次の朝も同じ山々を見ることができた。なぜなら船は大きな円を描いて日本に向かっており、カナダ沿岸をかかなりの距離運行するからであった。

この大きなサークルを描くルートは、遠く北方へ上がり、アリューシャン列島のすぐ近くまで行く。その島の付近では天候が悪く大雪にみまわれた。ある日の夜中、船が揺れ、荷物が船室の床を転がる音で目が覚めた。電灯をつけてみると、部屋中に書類が散乱していた。海はひどい荒れ模様で、起きる気分にはなれなかった。また電灯を消して、良く眠れないまま朝がくるのを待った。夜が明け、スチュワードが来て部屋の中の動くものすべてを固定してくれた。揺れる船の中で、朝食をとるのはとても難しかったが、面白い経験でもあった。特に飲み物を口に入れるのが難しかった。

このこと以外はあまり変わった出来事もなく、退屈な旅であった。予定通り、日付変更線を通った時は日を一泊越した。旅の終わりの頃には、素晴らしい天候に恵まれた。若者たちは毛布をデッキの上に広げ、長いあいだ身体を動かすチャンスがなかった。その分まで体操をした。デッキの上からは、これまで見られなかったような小さな漁船が見られるようになったので、私たちは日本が近づいてきたのに違いないと想像した。

三月二〇日。私は早朝に目が覚めた。外を見ると美しい木々にうもれた山々が海沿いまで裾野を広げているのを見て、日本に着いたことを知った。まるで絵本を見ているようであった。九時頃には、かなり遠くではあるが、富士山がそびえたつように見えた。東京湾に入ると、珍しい四角の帆をつけた帆船が浮かぶ、絵のような光景を目にした。漁師たちにとっては動力船のほうが便利だろうが、風景としては帆船のほうがずっと素晴らしい。

横浜港に着く頃は興奮が高まった。明らかに他の乗客も私と同じように見知らぬ世界に来て不安であっただろう。だが、出迎えの人々を捜し始めたら、そんな感傷は消えてしまった。船が停る前に、私はこの旅を最初に勧めくれた友人を桟橋に見つけた。彼の名はスミ（三井高維）であり、そして彼と一緒にいるのは息子のヨリであった。二人は私が一年前、英国のオックスフォード大学の学生であった時に知り合ったのだ。

二人を見つけて、言葉もわからなく知識もない見知らぬ国に来たという不安は消えてしまった。もう一人の日本人が手を振っていたが私は会ったことのない人だった。それはスミの友人だった。彼らは船の中で入ってきて歓迎してくれた。バスポート検査と税関は船の中で行なわれた。私のビザは問題なく、入国管理官は温かく迎えてくれた。だが、税関は別問題であった。二人の男性が私の荷物を調べた。中でも彼らが興味を持ったのは数冊の本である。私はその時はじめて日本の「言論統制」を体験した。ウエル著の「歴史概説」は詳しくチェックされたが許可された。だが、日本に関する二冊の本は取り上げられた。何の問題もない本であるが、当時、日本に関して国外で書かれたものは疑われたのだろう。カリフォルニアから持ってきたオレンジは全て没収された。

全ての手続きが終わる私たちは船から降りた。桟橋では青山学院からヘッケルマン教授が出迎えてくれた。挨拶が終わると彼はすぐに帰ったので、スミとヨリともう一人の友人は、私をニュートランドホテルへ連れていってくれ、共に紅茶を飲んだ。そこは六年後の終戦の時にマッカーサー元帥が日本に来て最初に泊まった所である。それからタクシーで横浜まで行き、電車で東京へ向かった。スミはガソリンの配給制限のため彼の車で来る事ができなかったといふた。

スミは大変裕福な人

横浜駅の人ごみには驚いた。日本の貧しさをいろいろ説いていたので人々が旅をするだけのお金を持っているとは思わなかったのである。それと当時は三等の運賃がいかに安かったのか知らなかったのだ。

後日教師となつてから二駅間を乗るのに支払ったのは、たったの一セント（五銭）を少し上まるだけであった。もちろん三等は混んでいたが、十分なスペースはあった。その時は気がつかなかったが、横浜からは長距離列車の二等に乗っ

たのだと思う。

印象に残っているのは通路の真ん中に、たんつぽが置かれていたことである。列車に乗る前、スミは四銭で新聞を買った。多くの人が風邪をひいていたのか大きなガゼのマスクをしていた。坊主頭の黒い学生服を着た男の子がいた所にいて、靴のかわりに下駄を履いていた。中には青っぽい簡素な着物を着ている人もいた。また駅や汽車の中にはだぶだぶのカーキ色の制服姿の兵隊たちも大勢いた。

横浜から東京へ向かう途中、貧しい家や簡素な小工場が続いていた。しかしどこにも一―二本の小さな木が植えてある小さな箱庭があった。東京駅でタクシーを拾いスミの家へ向かった。途中、皇居を通りかかった時、驚いたことにスミは帽子を取りタクシーの中からお辞儀をした。皇居の辺りは芝生や木々や塀があり広々としていた。広い道をしばらく走ると両側が高い壁のある路地に出た。後に一方の壁の中は大使館であることを知った。この道の二〇〇ヤード先に大きな門があり、その中を通り、広大な庭のある大きな英国調の屋敷の前に到着した。スミの家に着いたのである。

背の高い印象的な常緑樹が立っており、大変すばらしい雰囲気であった。その夜、私が「東京の道路は今日通って来た道のように狭い道が多いのか？」と尋ねたら、「広い道路の方が例外だ」といわれた。

家の玄関には英国で目にかかったことのある英子さんと家族五―六人が礼儀正しく何度もおじぎをしながら迎えてくださった。玄関でスミと私は靴を脱ぎスリッパに履き替えて、この素敵な家に入った。ここには私の住居が決まるまでの一ヶ月間滞在することになっていた。

この家には当時、他のお客も泊まっていた。そこで私は一階の本来は応接室であるベッドルームに作り変えた部屋に通された。そこは大変居心地のいい部屋で一ヶ月間快適に過ごすことができた。まだ三月だったので、英国風の暖炉に火が入っていないれば寒かったことだろう。その夜ボーイが来て窓の重いカーテンを開けていった。それから広いダイニングルームで軽い夕食を済ませてから休んだ。

私の話から、貧しいはずの日本で広大な家に住んでいるスミは大変裕福な人であると思っただろう。事実、スミはある日本の財閥の子息であり、彼によって普通では見られない日本の一面を見ることができた。とにかく無事に日本に着き、

想像していたのとは違った経験をしたことになる。

私の仕事が始まるまで一〇日はどあつたが、すぐに私が教えることになっている学校の校長に会い、教師たちにも紹介された。

私のホストは私に日本を知って欲しいと、学校の始まる前日には有名な歌舞伎座に連れていってくれた。全く言葉は分からなかったが、舞台のセットや音楽は夢の世界のように思えた。そして科亭へ行った。そこでは床の上に座り、芸者たちが踊るのを見ながら日本食を食べたが、それら全てが私にとっては目新しいものであった。その日の夜はすっかり疲れてぐっすりと眠れた。

熱湯の中

学校の始まる前の週末、スミと私は汽車で小田原へ行き、そこから車で舗装されていない道を箱根の宮の下富士屋ホテルまで行った。そこは凝った造りの温泉ホテルで（現在も）、プールや沸騰するお湯が入っている大きな浴場があった。そこでは何かの会議が開かれていて、スミが日本各地から集まって来ている参加者に会うようにと勧めてくれたのだ。

そこで会ったのは若い日系アメリカ人で、ツネオまたはタジといった。彼はスミの秘書になる予定で、私と同じく東京に住む所を捜していた。スミは私たちにアパートをシェアしたらどうかと提案した。彼はとても感じのいい人物で、そのことは数週間後に実現することとなった。

その日の午後、タジと私はホテルの裏の竹が茂った山を登り、そこから頂上に雪をかぶった富士山を眺めた。それから私は「青春の泉」と命名されたプールに泳いだ。夜は入念に飾られたホテルのダイニングルームで、会議の出席者たちと夕食を共にした。メニューの中のサラダのレタスはホテルの庭で取れたものであった。

その晩はぐっすりと眠れた。外は寒かったが部屋の中には、周囲に穴の開いているレンタンが入ったストーブがあり、一晩中燃えていた。このストーブは二四時間部屋を暖めておくことができるそうである。タジと私は後に同じストーブを私たちのアパートに入れたが、非常に安くて大変に満足できる暖房だった。

ホテルの支配人の山口氏は一四インチのヒゲをはやしていた。部屋に置かれた書物には、この富士屋ホテルが日本で最初の洋式ホテルであると書いてあったが、

後に日光で似たようなホテル（山口氏の兄弟が建てたホテル）に泊まった時、そこにも日本で最初の洋式ホテルであると書いてあった。多分両方とも同時に建てられたのであろう。ホテルの庭には尾の羽の長さが一四フィートもある鶏を見た。実際に計った訳ではないが、まさにそのくらいの長さはあったと思う。

会議終了後、私の新しい友人となったタジはこのホテルの有名な美しい和風の浴場に案内してくれた。タジは先に入り、お風呂の端に幸せそうな笑顔を浮かべ腰掛けていた。私も片足を入れてみたが、物凄く熱さで思わず飛び上がった。タジは笑っていった。どうやって彼がその熱湯の中に入れるのかが不思議だった。私はもう一度やってみてみたがやっぱりだめだった。タジは私が入れるようにと水の出る所を捜してうめてくれた。その結果ようやく風呂の中に入れたが、一度入ってみるととても気持ちよく、最後には出たくなってしまう。

その後、スミが車を呼んで小田原まで行き、汽車で東京まで帰った。小田原への車中からちらつと満開の桜を見たが、始めての経験だった。

学校が始まる前に床屋へ行きかけた。スミはまず私のお金を両替するために銀行へ連れていってくれ、両替した後、彼の行きつけの床屋のある三越デパートの上へ案内してくれた。床屋では身振り手振りでどうにかなった。

帰りはスミが教えてくれたとおり地下鉄で家まで帰った。窓口で目的地の駅名をいってキップを買ったのだが、最初の試みで巧いかった。さて地下鉄には乗ったが、私が行くこうとしていた駅は通らずに、すぐに終点に着いてしまった。全員降りたのでしかたなく私も階段を昇って通りへ出た。

私は途方にくれ、どうしたらいいかわからなかった。そこは明らかに私が来たかった場所ではないが、正しい方向に来たのは確かだった。困った顔をしていたらしく、ドイツ人と思われる親切な外国人が立ち止って、地下鉄の乗り換え方を教えてくれた。そしてやつと目的の駅へ着き、家に帰ることができた。多分スミは地下鉄に乗ったことがなく、二つの線がまだつながっていないの知らなかったのではないかと思う。

スミは、私が知っておいた方がいいと思う日本文化がもう一つあるという。それは茶道だった。スミの奥様の英子さんの父親が茶道をたしなむ関係で、お茶会に参加することになったのだ。スミは百年ごとに行なわれる茶道のお祭りが開催される仏教のお寺に、英子さんのお父様と私を連れていってくれた。お寺の境内にはお茶室があり、その入り口は大変低く、私たちは中に入るのに座るようにし

なければならなかった。このことは我々に謙虚であるべきことを教えているのだという。

中は美しい和室になっており、その床に座り、部屋や美しい調度品をゆつくりと眺めた。そして外に出てから筆で記載をした。それからお寺の隣にある部屋に案内されたが、そこには私たち用に椅子が用意されていた。スミは私以上に床に座っているのが限界だったようだ。お茶の前に出された甘いお菓子はおいしかったが、お作法は大変ゆつくりで、お茶は苦すぎるといった。ともかくそれらの深い意味を理解したのは大分後になってからのことである。

（翻訳：宮崎佳子・前姓星野）

新学期

四月上旬には、青山学院の新学期が始まった。市電（路面電車）を使ってスミの家から学校へ行く方法を教わったので自分で行った。受け持つの学部では集会が開かれた。そこで初めて公衆の前で説まれる教育勸語を聞いた。全員が朗読中は深々と頭を下げていた。とても奇妙な経験であったが、戦後こういったことをさせられることがなくなり嬉しく思う。後に聞いた話では他校の学部長が教育勸語を一語読み違えたために解任されたということだった。

集会の前後にはたくさんの方の先生方に会い、暖かい歓迎を受けた。青山学院の多くの先生方は英語を話すことができ、またそれを楽しんでいるように見えた。E・T・イゲルハート教授にも再会した。数年前エール大学で学んでいるときに、同校を訪問中の教授と出会い、語り合ううちに、私は日本に対して深い関心を持つようになったのだ。

その後、英語教師のポール尾崎氏に紹介された。彼はアメリカで学び、日本人でありながら、同時にアメリカ人のようであった。私が学校の業務を始めるにあたり彼が世話役を頼まれていた。授業開始の折には彼が各教室に案内してくれたのだ。

教室に入ると、一人の生徒が何やら叫んだが、実は後になって「きおつけ」であることを知った。生徒全員が立ち上がり、またその生徒が何か別なことを叫ぶとみんなが頭を下げた。尾崎氏が頭を下げるので私も真似をしてみたが実に居心地の悪い思いだった。

この行事はどの教室においても授業の始めと終わりに行われ、戦争によって私の教師としての仕事が中断される二年九月後まで続いた。現在でもまだ日本の教室においてはこの行事が行われているが、私としては語学と一緒に文化も教えている考えなので、現在、私の受け持つクラスでは西洋式の作法で行うことにしている。

尾崎氏は各クラスで私を紹介すると、後は私に任せた。私は日本語がまったく話せなかったし、生徒もほとんど英語を話せないに等しかった。学部長に、授業で何をすべきか尋ねたが、彼はたが「やりたいようにやりなさい」というただけだった。素晴らしい助言だ！そこで、とにかく自分の名前をなのった後、これまでに学んできた学校について語り、彼らにも同じことをするようにいった。クラスには五〇人近い生徒がいたため、これはとても良い時間稼ぎになった。それから私は歌を教えることにした。実際それは巧くいったようで何とか時間が過ぎていき、私は救われた。

私は生徒たちのことを知ることができるとかどうが疑問に思った。全員が短く刈り込んだ頭に黒い瞳、そして黒の制服を着込んでいて、私の眼には皆同じに見えたのだ。だが、幸運にも各クラスに一人か二人は日系二世の生徒がいて、私のところにやってくることはとても親しげに英語で語りかけてきたので、なか必要あれば、クラスでは彼らの助けをかりることができるとがわかった。そして後にそのうちの何人かとはとても親しくなった。

晩餐会

学校の仕事が始まったところでタジと私は家探しを開始した。福島教師が我々とウエルス嬢と引き合わせてくんだり、彼女が日曜のデ・ガリス夫人の家に連れて行ってくれた。そこは山の手線の恵比寿駅から徒歩約一〇分のところにあり、山の手線は環状線で青山学院の近くまで行っていた。家は丘の上であり、静かな人気がない地域だった。そこはとても眺めが美しく、特に家の裏側のすぐ下に見える海軍研究所がきれいだった。

我々はデ・ガリス夫人に会い、ご主人がなくなった後に改築したという二階建てのアパートの一室を借りることに決めた。

数日後、少ない持ち物をまとめてアパートに落ちついた。そこには小さいが朝

食やその他の食事を作るのでできるキッチンが付いていた。そして小さな寝室二部屋とダイニングルーム、そして小さなリビングルームがあった。ここでは気持ち良く過ごせ、友人を招くこともできた。

何日か経って、スミが家に呼んでくれた。皇族の殿下と妃殿下を迎えた晩餐会があったのだ。その日の午後、タキシード（大学のグリークラブ時代に着用したものだった）をスーツケースに詰めて、山の手線と路面電車を乗り継いでスミの家に向かった。寝室を借りて着替えを済ませ、スミと英子夫妻、及び数人の客人と賀陽宮殿下ご夫妻の到着を待った。殿下の到着前に宮内庁から電話があり、ご夫妻はこちらに向かっているという連絡が入った。そこで我々は玄関ホールに立ちお迎えの準備をした。

ご到着の時には皆揃って深々と頭を下げた。殿下は軍服姿、そして妃殿下はドレスをお召しであった。そして我々が一人ずつ挨拶をする間、お二人は広い応接室の一方に設けられた特別席の前に立ちになっていた。やがてホストが先に立って二人をダイニングルームまで案内した。

我々二名は大きなダイニングテーブルに着席し、各人の前にはコースごとに盆に乗せられた食事が運ばれてきた。私の隣にはかの有名な徳川家直系の徳川殿下の孫にあたる方が座っていた。とても不可解なことだったが、彼は特に宗教に関心があるわけではなく、ただ、教養のためにオックスフォード大学で神学を学んだとのことだった。

料理の一つで印象に残ったのは、お湯が入った漆塗りの碗の底に、死んだ小魚が三匹沈んでいたことだった。料理が続く中で、殿下はアメリカ人が日本についてどう思っているか知りたいとおっしゃった。客の中の一人の年輩のアメリカ人がお答えしたのだが、その内容は実に正直だと私は思った。

殿下がお帰りのになった後、私は普段着に着替え、路面電車と山の手線を使いながら家に帰った。

それからだいぶ経った四月のある夜、私は生徒たちをアパートに招いて会話を機会を持つことにした。そして何人かがやってきた。わたしは彼らのために用意したお茶とケーキを運び、生徒に配り始めた。しかし全員揃ってお腹が空いていないという。私はとてもがっかりした。打ち解けた楽しい夜になるように心を込めて準備したつもりだったので私はとてもがっかりしたが、すべてをキッチンへ戻した。

かなり後になつてわかつたが、日本人は礼儀として、最初の申し出を断るようにしつけられていたのだ。したがって私は、繰り返して勧めるべきだったのだ。私はとてもがつかりしたが、おそらく生徒も同様であつたと思う。それでも私たちは何とかお互いに話しをしようと努力し、とても興味深いひとときを過ごした。

気の毒な伊勢海老

ある日、スミが銀座界隈の小料理屋へ昼食に招いてくれた。店の主人は小さな調理場が見渡せるカウンター席に案内してくれた。料理人の一人がスミにこれの良いかという意味で、生きた伊勢海老を持ってきた。良さそうだとスミがいうと調理場に持って行き、流して背中を割って箸で、尾から身を取りだし水洗いをする。と、レタスの上に盛りつけた。カウンターに運ばれてきた気の毒な伊勢海老はまだ動いており、それを眺めながら食べねばならなかった。私は礼儀正しく食べましたが、やはり気分が悪くなった。

春の後半になると私の教えている中等部の二年生の遠足があつた。総勢で数百人の生徒と教師が一緒だった。まず電車で池袋から吾野へ行きそこからハイキングをした。途中、山のせせらぎや小さな農村に沿って歩き、それから山の頂上をめざして登った。そこにはおもしろいことに、ネズミを祭った寺があつた。ここで昼食をとり、来たときは別のルートで下山した。下る途中、小川のとおりで休憩を取り、電車で池袋まで帰った。

歩いている間中、私はできるだけ生徒たちに話しかけて、彼らから日本語を学び取るうとした。だが後になって、生徒と一緒にいる時は常に英語を教えるべきではないかと思ひ始めた。多分これは良い考えに達しなかつたが、その結果として私自身は日本語をうまく喋れるようにはならなかつた。ともかく、無事に東京に戻り、駅前広場に集合し、天皇のために万歳三唱をして散会した。

ある春の週末、色々な人々と一緒に立教大学のポール・ラッシュに招かれ、彼が開発中の山梨県にある八ヶ岳の麓まで出かけた。ポールは私たちのために列車の特等室を手配してくれたのでとても快適な旅だった。また彼の用意してくれた日本の弁当はお腹がすいていたのでとてもおいしかった。

駅からは登り坂でポールの開拓している清泉寮まで歩いて行つた。そこは八ヶ岳の中腹に続く斜面にありとても美しいところだった。緑が生い茂り、愛らしい

野生のアゼリアがそこかしこに咲いていて、これらを鑑賞するため私たちは招かれていた。宿泊所は質素ながらも快適だった。

スミは再び特別な会合に招待してくれた。それは「ケンブリッジ・オックスフォード会」で、年に一度開かれる夕食会だった。そこで私は天皇（昭和）の弟君であられる秩父宮殿下にお目にかかり握手をした。殿下はオックスフォードで学んだことがあり主賓だった。またそこでは皇室儀典長を務める松平伯爵や、オックスフォードにあるケンブリッジのいづれかで学んだ大勢の人たちに出会った。ちなみにこの会は世界で唯一といえる「ケンブリッジ・オックスフォード会」で、名前の順番の由来はケンブリッジの人たちが先に日本に来ていたためだといふ。

ある日曜日、一人の生徒が父親と一緒に歌舞伎座に招待してくれた。あまり芝居の内容はわからなかつたが、舞台のセットや衣裳、演技はすばらしく、楽しく鑑賞できた。生徒もその父親と一緒にいて楽しい人たちで、そしてとても親切だった。

私のメモ帳で見つけたことだが、ある日、中等部の礼拝でスピーチをするように頼まれたが、英語で喋つたため誰も理解できなかつたことであつた。

私たち何人かの外国人が明治神宮の葛蒲苑に招待されたことがあつたが、その場所の美しさをうまく描写することができればと思う。葛蒲の花で埋め尽くされた池は大層美しく、回りの木立や緑におおわれた緩やかな勾配も見事だった。簡素で芸術的な東屋（あずまや）からのこの庭園の眺めを、明治天皇の皇后が大層お気に召されていたといわれている。その後、改めて明治神宮に行き、初めて白い玉砂利の参道とそびえ立つ松の木を目にして、これらが醸し出す雰囲気につきかり心を奪われてしまった。

四月の末、タジと私は若い日本人の友人に葉山海岸に招待された。まず、彼の家族の別荘に行き、使用人が用意してくれたとてもおいしい昼食を済ませた。タジと私は泳ぎに行こうとしたが、若い友人が海水が冷たすぎるというので、代わりに手漕ぎボートに乗り、みごとに真つ赤に焼けてしまった。海で漕ぐのは初めてだったが、波が穏やかだったため、大いに楽しんだ。しかし翌日は身体中が痛く、歩くのが辛かった。

ある日、靖国神社に一万五千人の兵士の御霊が祭られたと発表された。中国での戦いはずっと続いていた。時々、駅で兵役につく若い男が、家族や友人に見送ら

れているのを見た。また、中国で戦死した兵士の遺骨を出迎える集団を見かけることもあった。時折兵士の団が、かん高い音の横笛で軍歌を演奏しながら通りを行進していた。学校では、毎週全生徒の軍事教練が行われていた。そして時々将校が思いきり学生を殴りつけていた。

聞くところによると、このような仕打ちで顔を壊されたりした学生もいたらしいが、私たちの生徒がそうだった被害を受けたという話はなかった。日本が私の好きな方向に向かっていくのがひしひしと感じられた。私のこの国での存在が、別の意味での影響を少しでも与えられればと、私は願った。

初めての夏休み

一学期が終わり夏休みが始まった。教えるという大変な仕事を持つ者の楽しみの一つは、学期と学期の間の「自由な時間」である。

夏休みに入って最初にしたことは、初春に招待されて行ったポール・ラッシュの所に一週間程滞在することだった。そこにはおもしろい話題を持つ人たちがたくさんいた。その中の一人は中国から来たばかりで、日本人がそこでもんなことをしていたかを色々話した。彼のいつていることは本当だろうと感じたが、彼の賢明さを疑った。彼が見たことを日本で公表したからといって、何か良い結果が期待できるわけでもなく、むしろ彼自身を非常に危険な立場に置くことになるからだった。

このキャンプでは、多くの時間を辞書や小学一年生の教科書を使うことで過ごした。その結果、子供向けの訓話を幾つかと、片言の日本語を少し学ぶことができた。

キャンプの後、生徒の家族に招かれて、約二―三週間滞在する予定で、ただ一人で汽車に乗り、小諸経由で軽井沢へ向かった。この寛大な招待と親切には今もなお深く感謝している。別荘は高台にあり窓からは高原の森林が遠くの山まで広がっていた。後方には日本の火山の中でも比較的活発な浅間山があった。私の滞在中にも何回か噴火し、回りに灰色の火山灰を撒き散らしていた。

招待してくれた人たちは私が食事で困らないように、洋食を作ることでできる友人を呼んでいた。最初の夜の食事は私だけフルコースだった。スープで始まりデザートで終わり、その間、私の友人は普通の日本食を食べていた。私のために

これだけの手間をかけてもらい大変に恥ずかしい思いをした。

私は生徒の太郎が食べていたのと同じような和食で十分だったが、私の願いは聞き入れなかった。しかし二日目には本当に簡単な食事にしたいという私の気持ちを彼らに信じてもらうのに成功した。ここで説明しなければならぬのは「彼ら」とは別荘の世話をしている女性と、わざわざ料理のために呼ばれていた友人で、太郎の家族はみんな東京にいて、父親も私の間一度しかやって来なかった。食事の件が片づいた後はくらぐらとでき、近くの森の散策を楽しんだ。滝を見に行ったり、東京の雑踏から遠く離れた静かな休暇を楽しんだ。私がお世話になった別荘は、駅からタクシーで五分ほどの浅間山麓の急勾配にあった。登っていく途中にとても目を引く建物があったが、それがグリーンホテルで、私たちのいるところからそう遠くはなかった。たいてい散歩に出かけるときはまずこのホテルの前を通り、そこから目指す方向に向かった。

ある朝、太郎は軽井沢の一日観光をしようと提案した。軽井沢は避暑地として有名で、東京にいるほとんどの外国人が夏の間訪れているようだった。そして軽井沢は、我々の使っている駅のすぐ隣の駅に近かった。そこで我々二人はグリーンホテルからバスに乗り、当時、番掛（くつかけ）と呼ばれていた駅（現・中軽井沢）から汽車に乗った。

軽井沢駅まではほんの数分だった。駅から国道を挟んだ向こう側では、軽井沢の中心部に向かう非常に狭い線路の上を走る電車（草軽鉄道）が今にも発車しそうだった。そこで、急いで汽車から降り、国道を走って渡り、電車に飛び乗ったとたんに発車した。

太郎がうっかり忘れていたのは、この狭い線路の上を走る電車には時折、旧軽井沢と呼ばれているこの避暑地の中心部で停らない「急行」があるということだった。「急行」といっても、この電車の速度はせいぜい時速一〇キロから一五キロしか出ていなかったと思う。

旧軽井沢まで来るとスピードが落ちたので停るのかと思っていたがそうではなかった。飛び降りることもできたが、そう思ったときにはもう駅を通り過ぎ、遠い彼方へと向かっていた。その時になって太郎はまじがいに気付いたがもう遅すぎた。

そこで太郎が、この際だから浅間山の北側にある溶岩でも見に行こうといった。電車は小さな山々の尾根の間を這うようにゆっくりと溶岩の近くまで向かった。

それは本当に美しい旅だった。そして落岩も壮大だった。

ちょうどアメリカが独立した頃、山の麓からあふれ出た落岩が一つの村を破壊してしまつた。そして二〇〇年後の今、草花や小さな木が根を張り始めていた。

私はそれから約五〇年後に同じ場所を訪れたが、落岩のあちらこちらにかなりの大きな木になった木が見受けられた。とにかく最高の遠出だった。帰りはバスでグリーンホテルまで戻ることができた。

「サムライの娘」

後日、軽井沢行きに再挑戦したが、そのときは自転車に乗って行き成功だった。この時に三十四年前、エール大学時代に知り合ったアメリカ人が創設したある団体の寮を訪ねた。そこに立ち寄ったのは、太郎のところでの滞在を終えた後に、ここへ来るように招待されていたからである。東京のルームメートのタジはすでに到着していて、太郎と私を責任者のところへ案内してくれた。責任者のメル・ボリスとはエール大学以来の再会で、その当時は日本に行くことになるなどとは思ってはいなかったが、会えて本当にうれしかった。

(翻訳・岡 順子、岡 淳)

このメル・ボリスという人は、一度会ったら忘れられない種類の人であった。彼はとても積極的な性格で、会ってわずかな時間の内に友人であると感じさせられた。彼は今世紀の初めに最初の英語教師として来日し、友人をたくさん作り、彼らとともに新しいタイプのコミュニティ生活を実践する組織を結成した。

その支援のためにメンソレータムを製造し、建設業でも成功した。彼は日本女性と結婚し、妻の姓をのり、その籍に入り、日本人となった(日本人になる場合は日本の姓をのる必要があった)。とにかく、メルに会うのは楽しく、後に彼とはよく連絡を取り合った。

ほぼ一日中軽井沢を散策した後、太郎と私は自転車で山道を登り下りする裏道を通して太郎の家に戻った。

二日後、太郎のもてなしに感謝し、今度は一人で数日前に訪れた軽井沢の宿泊所に向かった。そして、灼熱の東京に戻るまでの数週間をそこで楽しく過ごした。もちろん私は床に眠り、宿泊所の普通の食事をし、日本の生活をした。食物もな

んとか大丈夫であったが、滞在が終わりに近づいた頃、私は街の小さな店でアメリカ風のハンバーガーを食べた。その時は今までこのような美味しいものは食べたことがないとすら感じるほどだった。

この頃私は、レッドランズ大学時代のクラスメイトで五年以上も会っていないかったボブ・ロスに会った。彼の父もまた日本で、ごく初期の頃に英語教師をしておりボブも日本で育っていた。

彼はレッドランズの寄宿舎では有名であった。何故ならば、彼がトイレの個室に入りドアを閉めると不思議なことに彼の足がいつも消えるのである。日本に来て、便器が床に組み込まれ、そこにかがむということがわかってから、ボブにとつては西洋式トイレを日本式に使う方が快適だったことが理解でき、謎はとけた。とにかく私たちは一緒に楽しい日々を過ごした。

またこの頃、私はあるコンサートのため東京から二世のグループと共にやって来た西山千と会う機会も得た。彼は私と同じ宿泊所に泊まり、夜中まで話し込んだ。それは一九三九年のことで、現在の一九九〇年でも私たちはまだよき友人である。

軽井沢滞在中に列車で三時間ほど日本海のある野尻湖へ行く機会があった。私は宣教師の家族に招かれ、湖で泳いだり、ヨットに乗ったり、散歩したり、湖の周辺にあった小さな村を訪ねたり、楽しい時を過ごした。

ところで、野尻湖の別荘地区や軽井沢の大部分(もしくは全部)は西洋人(主に宣教師たち)によって開拓されたのだが、今では、完全に日本人に占領されている。

西洋人がやって来る以前は、夏に休暇をとることなど不可能な贅沢であり、統計によると少しずつ変化しつつあるとのことだが、現在でさえも大部分の日本人は二―三日以上の休暇を取ることほめつたにない。

とうとう東京へ戻り仕事へ復帰する準備をする時がやってきた。戦前東京の夏は暑すぎて健康を保てないという考えが強かった。その真偽はともかく、その頃の多くの日本人が考えることさえできなかった休暇を取る時に、この考え方は確かにうしろめたさを軽減する効果はあった。近年になって、まだ夏はとても暑く不快だと感じるが、健康に関する言い訳はもはや通用しなくなっていました。

私は学校が始まる前に、春に過ごしたことがある海辺の別荘に、その持ち主であるご夫婦から招待を受けた。ご主人は慶応大学の創始者のお孫さんで、また奥

様は日本よりむしろ西洋でよく知られていて、私も学生時代に読んだことがある『サムライの娘』という本を書いた女性の娘さんであった。

後日、私はその著者にお会いする機会を得て大変興奮した。戦後、私は彼女と大変親しくさせていただき、彼女の最後となった船旅にご一緒させていただく機会があり、その後、彼女の葬儀のお手伝いもすることができた。

このご夫婦は全く素晴らしい話し相手で、彼らがふるまっていた日本料理は美味しかった。そしてここでは泳ぐこともできた。戦後はよくその別荘へ休暇や泳ぎに行くことになったのだが、その時は、後にそのようになるとは考えていなかった。その日はあらゆる意味で楽しく、完璧な英語力を持ったご夫婦と知り合うことによって、日本に対する知識だけでなく洞察も深めることができた。

私の友人のスミの奥さんの英子さんが、友人の息子の個人教授を頼んできた。

その息子は両親と英国に住んでいた時に英語を学んでいた。両親は彼が英語を忘れないように週に一度彼と遊んだり話したりしに、家に来てほしいというのであった。それは英語を教えるのではなく、すでに彼が知っていることを忘れさせないようにすることだったので、とても簡単な仕事だった。

二期

また学校が始まり、そしてすぐに私は大学のあるクラスの新生徒に、ボクシング部が参加する試合に誘われた。みんなは私が出かけて行ったことをとても喜び、私は二人の生徒が戦うのを観戦した。

スミが私とタジに相撲の機軸席の切符をくれた。そのスミの一族が持っている席は土表の真ん前だったのが、床に座らなければならなかったので私たちにとって二時間半はとても長く感じられた。力士は実際の取り組みよりも、塩をまいたりお互いを睨み合って仕切る方に時間をかけていたように思えた。

専門家にとっては力士が睨み合っている時がとても重要かつ興奮する瞬間で、力士はそのようにして精神的に相手の後位に立とうとしているようだ。近頃では私は実際に見に行くよりもテレビで相撲のニュースを見る方が楽しめるのであるが、それはたぶん解説者が取り組みだけでなく力士の心理的な葛藤についても解説してくれるからだろう。

ある晩、私は日本人の若い友人のお父さんに夕食に招かれた。出かける前に、

私は好き嫌いかかわらず出されたものは何でも全部食べる決心をして行ったが、最初の料理が出された時、私は自信を失った。

それは頭と尻尾がついた小さめの二匹の魚だったのだ。最初私はホストが食べ始めるのを待っていたが、彼も私が食べ始めるのを待っていたことに気づいたのので、彼にどのように食べるのか尋ねた。彼は箸を取り、魚を一匹持ち上げてその頭にかじりつき、残りを皿に置いた。私は今までにこのような魚を食べたことがなかったし、また食べたとも思わなかったが、何でも食べる決心をしていたので箸で魚を持ち上げ、目をつぶりおなりをついた。それはどまらず心はなかったが、もうこれ以上悪いことが起こらないように願った。幸運なことにそれ以後はとも楽しき夜になった。

またある夜は、大野さんという私とタジが知り合いになったビジネスマンがとても美味しい中華料理をご馳走してくれた。メインの料理は照の唐揚げで、それは骨まで食べられるように揚げられており、とても美味しかった。

食事中に、彼は私たちがもつと日本の社会の現実を知るべきであるといい、これから私たちを法で認められていた売春地区の吉原へ連れて行くといひだした。食事の後に彼は車で私たちをそこへ案内した。私たちは車の外へは出なかったが十分見ることができた。そこはライトが輝くぞつとする所で、それぞれの建物の正面には娼婦の写真が飾られ、男たちが相手を選ぶために見ていた。私はその地域から出て新鮮な空気を吸った時にはほっとした。

私はたいいてい日曜日には東京ユニオン教会へ行った。そこで軽井沢で知り合いになった若い二世をよく見かけた。彼はコロラドから父の遺骨と共に帰国し、アメリカでは日本人に対する差別を感じ、よりチャンスのある日本に戻ったのである。

彼は母親と一緒に東京の郊外に住んでいた。ある夜、彼は私を夕食に招待してくれた。それは私にとって初めて伝統的な日本の家を訪れる機会だった。畳の上の低いテーブルで食事をした。後日、丁度パールハーバーの少し前に、彼と私は私の家で一緒にお互いの誕生日を祝った。

日本の学校で教えることの楽しみの一つは、一学年の全生徒と担任の教師たちでおもしろい所へ小旅行へ行く機会があることだった。私にとってそのような旅行の最初は、中学二年生と行った旅だった。行き先は日光だった。二百人以上の生徒を教師たちが引率した。その教師たちの一人は私が初めて学校にやって来た

頃に大いに助けてくれたポール尾崎だった。

私たちは浅草から特別列車で行くのに十分な人数だった。日光駅から街を通り抜け、有名な神社やお寺のある所まで歩いて行った。もちろん一番興味深い所は豪華な装飾の施された東照宮だった。そこには故意に柱を逆さにつけた門があったが、それというのも東照宮を建築した卓抜した技を神様がねたまないようにと配慮をしたものだといふ。それからみんなで集まって、持ってきたお弁当を食べた。

私たちは美しい中禅寺湖の高さまでまっすぐに登るケーブルカーに乗るために登山電車に乗った。登山電車に乗った後半から私たちは紅葉した木々におおわれた美しい山々に囲まれた。ケーブルカーから湖までバスがあり、そこから私たちは輝く湖に沿って何キロも歩いたように思えた。湖の途中まで来た時に、湖に向かって右の道を進み、美しい湖のある奥日光の方向に登っていった。美しい滝の前を通り、何度も休息を取りながら長い道程を歩き、ついに私たちは最終目的地である山の上にある小さな湖の近くの日本旅館にたどり着いた。

宿の人たちは私たちの到着を待っていた。そしてすぐに大きな温泉の風呂場は私たちの団体の混雑することになった。長い散策の後、熱い風呂に入るのは、日本での生活の特別な楽しみの一つである。風呂から出て、私たちは大きな畳の部屋の長いテーブルにつき食事をしたが、空腹であったため大変なご馳走に思えた。

先生である私たちは子供たちに熱い御飯をよそってやり、自分たちも席につき食事をした。これが日本流なのだ。間もなく部屋に布団が敷かれ私たち教師をふくむ全員が眠りについていた。

翌朝、先生たちは別室で朝食を取ったが、私はその時初めてトコロを食べた。擦り下ろしたものを御飯にかけて食べると美味しいが、長く糸を引くので少し食べにくかった。朝食後、私たちは道路についたのであるが、幸いにも今回は下り坂であった。前日遅くなったので立ち寄らなかつた素晴らしい滝にも、立ち寄る時間があつた。

私たちは湖に沿って歩きケーブルカーのふもとへ続く道を進んだ。そして登山電車と列車に乗り東京へ戻った。私たちは天皇のために万歳三唱した後、浅草駅で解散した。

私の青山学院での仕事は、中学校とその後三年間ある専門学校で教えることで

ある。中学校では各クラスに二、三人の二世の生徒がいた。彼らは両親の国について学ぶためにアメリカから連れて来られていたのである。彼らはそれほど満足していなかったようだが、私に対してはとてもフレンドリーであった。時々私が授業中にうまくコミュニケーションがとれず困難な状況に直面した時など、彼らは通訳をして私を助けてくれた。

その中の二人は私の同居人のタジをバサディナに居る時から知っており、私は彼らとともに仲良くなった。彼らは私たちの家へしばしば遊びに来てくれた。彼らは二人共、戦争が始まる前になんとかアメリカに帰ることができた。

青山での最初の秋の学期も終わりに近づいた頃、私は黄痘にかかった。青山学院の外人教師の一人が私を訪ねて来て、タクシーで東京サナトリウムに向かう私を見送ってくれた。東京サナトリウムはスクア先生を代表として第七日キリスト再臨会が運営をしていた。私はたかさんの温泉治療と美味しい美食などのすばらしい看護を受け一日間そこに滞在した。そこで働く人たちはみなとても親切で私は十分に休息をとった。

上海旅行

幸いなことに私はクリスマスを十分に楽しむのにたっぷり時間がある時期に家に帰ることができた。私はお昼に一つ、夜に一つ、一日に二つのクリスマスディナーの招待を受けるという失敗をしてしまった。さすがに二軒目のディナーではあまり食べることができずホストをがっかりさせた。その日はそれまでの中で一番たくさん食べた、またそれ以後もその日ほど食べたことはないと思う。それでも気分が悪くなることもなく何とか切り抜けた。

友人のスマを通じて知り合った家族で皇室のために働いている人たちがいた。新年の休暇中に彼らは私たちを招いてくれた。皇室から賜った杯で甘い酒といろいろな種類の和菓子をふるまってくれた。

東京で知り合い、前から私を招いてくれている友人に会いに、年の早い時期に名古屋へ行った。名古屋に着くとすぐに駅で警官に呼び止められ、パスポートを提示するようにといわれた。これは始めての経験だった。私の友人はとても親切であちこち案内してくれた。私は特に名古屋城を覚えていた。その時見たのはオリジナルであったが、後に焼失し再建された。

この年の冬、私が日本に来て間もなく箱根の富士屋ホテルで見たのと同じ種類のとてもシンプルなレンタンストープで、私たちは居間の暖房をした。レンタンはゆっくり燃えるように垂直な穴がいくつも明けられた大きな塊で、ストープの内部と同じ位の大きさであった。そして夕方から私たちが帰宅する頃まで暖かく、翌朝、ストープのふちでトーストが焼けるほど長持ちした。

私たちの家にはとても小さな台所がついていたが、私たちはよく昼食や夕食を外で食べた。しかし時々私は夕食を作ったし、何度かアップパイも作った。一度はあつましくも青山学院の院長である阿部博士と中学校の校長である宮古田氏を食事に招待したことがある。彼らは親切にも出されたものは全て平らげてくれた。

夕食を作るのに遅すぎる時間に学校から帰る時は、私はよく東横デパート（現在のものよりはかなり小さかった）へ行き、好物の焼きそばを食べた。最初は注文できるほど日本語をよく知らなかったのに、店の外のケースの中にあるワックスでできた見本に書かれた漢字をできるかぎりうまく写して、店の人に見せたのである。それはうまくいった。しかし次の日には日本語で何というかを学んでいた。

最初の年の春休みの終わ頃、私を招いてくれた友人を訪ねて上海へ行った。神戸から東洋丸で上海へ向かう船旅は、まだ上海が見えない所で船が泥の堆積にはまってしまったこと以外は、特別なことは何もなかった。潮が満ちて私たちの船は何とかその場を離れ、波止場で待っていてくれた友人になんとか会う時間に着くことができた。もし彼がそこにいなければ私は一体どうなっていたのか想像もつかない。

上海では多くの人々と会い、いろいろな出来事について語り合い、とても楽しい時を過ごした。数年前私がまだ大学生だった頃、この友人は、彼女の両親が住んでいた外国人居留地の周辺で日本軍が戦っていたことをとても心配していた。私はこの旅で破壊の結果を見る機会を得た。街の外には建造物が何もなくなくなっていたのだ。外国人居留地はひどく混んでおり貧しかった。その当時、人々は十分な食料も住む所もなかったのだ。毎朝、道端から一ダース以上の死体が回収されたといわれている。私は何軒かの中国人の家を訪れたが、彼らの生活はとても質素であった。

上海に向けて日本を出た時、私は二四ドルしか持っておらず、どうなることか

と心配した。しかし心配するには及ばなかった。食物にいくらかのお金は使ったけれども、友人たちは私をゲストとして款待してくれたからである。信じられない程すばらしい交換レートのことも私は考えに入れていなかった。信じられないかもしれないが、私は上海でスーツ、シャツ、靴、レインコート、帽子、スーツケースなどを買ったが、すべて合わせて一五米ドルだったのだ。

私は日本へ戻るフェリーで長崎に着いた。そして東京行きの列車に何とか間にあうように長崎駅にたどり着くことができた。もちろんその頃はトンネルなどはなかったで本州へはフェリーで向かったが、その夜は天気が悪く到着が遅れ、下関発の接続列車にもう少し遅れながら乗る場所があった。

（翻訳：林 花織、林 真二）

二年目の日本（一九四〇年）

学校での二年目は様々の恒例行事で始まった。更にこみいっていたことは、スミが帰国子女たちのための新しい学校をスタートさせ、正式の英語の教師が決まるまで私にピンチヒッターを頼んだことだった。実際のところ、最初は小規模だったので、私の時間はそんなに取られず、六週間の内に正式の教師が見つかった。スミが家族と共にイギリスから帰った時、子供たちは日本の学校のシステムに慣れるのにとても苦労した。多くの友人たちの子供たちも同じ問題を抱えていたのを知ったスミは、日本の教科を学ぶのに特別な補助をし、同時に生徒たちが海外に居た時に得た語学力を保持するという、特別な学校を考え出したのだ。それは素晴らしいアイデアだったし、私もできるだけ助けたかったのだが、正式の教師が見つかった時ははたした。

この年、学校の春の遠足は、東京の西にあるそんなに高くない高尾山だった。きれいな所だった人が多すぎた。

同居人のタジは仕事でビルマに行ってしまったので、けっこう広々としたアパートは私一人になった。そこで夏休みが始まった時にそこを出て、秋に東京に戻って来た時に、友人一家の所に移るように取り計らった。

アパートに私がまだ一人で居る時、友人たちが親切にも招いてくれたり食事をご馳走してくれた。ある週末、スミがイギリスからの友人たちを、鎌倉の向こう

の海岸地帯の一つである葉山に連れて行く際に、私も誘ってくれた。

スミは彼の兄の杜大なる別荘の庭にある、彼の別荘に連れて行ってくれた。そこに滞在中、私たちは海で泳いだ。そこは天皇が葉山の御用邸に來られた時に泳がれた場所のすぐそばだった。

夏休みの最初の週は、スミの新しい学校の生徒たちと山で過ごした。そこは私が一年前に訪れた山梨県の八ヶ岳の麓にある「清泉寮」だった。東京の暑さからのうれしい変化で、日本語を学ぶには絶好の場所であった。

これから電車を使って山々を横切り、前の夏にあんなにも楽しく過ごせた軽井沢にも行った。けれども、そこでは一晩だけを通して、県の反対のはずれにある野尻湖までの長旅に出るため自転車を借りたり、他の準備をするのに十分な時間を取った。

この自転車の旅は、軽井沢から長野の最初のあたりまでは、ずっと下りであった。何百もの大きなトラックが行き交う現在の道路事情を知っている人なら、私が自転車で行くことを行くなことを想像できかねるだろう。けれども五〇年前の事情はかなり違っていた。

道路は土で、ほとんど二車線には分かれていず、車を見たのも三〇分に一台ずつ位であった。行きに小諸の町を通り、少し買い物をした。そして、海拔が低くなり道を下降していくうちに段々と暖かくなっていった。

遠くから、道に沿って谷間を流れている千曲川で先生と泳いでいる男の子たちが見えた。それで、そこまで行つて彼らに加わって冷たい水につかった。今とはかなり違つて、当時は川はそれほど汚染されていなかったのだ。そして、さっぱりしたところでまた旅を必要だ、県庁の長野に着いた。

ここで昼食を取り、必死だった散髪をした。長野までの道路はまっすぐの下りだったが、ここからは道を聞かなくてはならなかった。私の日本語はまだ不十分だったので、町の通りを通っていくのはかなり心細いものだったが、ついに正しい道にいることがはっきりした。

ここからかなりの道のりが上り坂だったが、前と同じくめつたに車も通らず、交通上の問題はなかったが、暑かったのでとても喉が渇いた。かなり登つてから坂の上に来て、正面に「峠の茶屋」と書かれた看板のある小さな店を見つけた。でも残念なことにそこは閉まっていた。しかたなく、少し休んでから次の坂まで降りた。

この地点で、長野を出てから私を脅かしていた黒雲が、にわか雨を激しく降らせ始めた。だが雨宿りをする所はどこにもなかったため、傘の村まで走り続けた。雨がひどかったため、目的地の野尻湖まではまだかなりあったが、ここで休むことにした。

この小さな村に泊まるところがあるかどうか、疑問だったが、私の簡単な日本語を駆使して尋ねたところ、小川のすぐ傍にある宿に案内された。ここで風呂に入り、夕食を取り、床に就いた。部屋にはきれいな蚊帳がかかっていたが、網戸や防虫剤が普及する前はこれが普通だった。この蚊帳は全体的に同じ深緑色をしていて、部屋の中に部屋を作り上げていた。一日中の自転車こぎで疲れていたし、飛び交う虫たちからも守られて、私はぐっすり眠ることができた。

翌日、私は早めに出発した。空は晴れ渡つて、朝早くから暖かかった。自転車をこぎ始めてすぐに、前日、腕をかなり日焼けしてしまったことに気がついた。そして太陽はじりじりと私の手を焼いていた。そこをカバーするしか他に方策はない。半袖シャツしか持ち合わせがなかったのだが、長袖のセーターはあった。そこでかなり暑かったが、セーターを着てどうにかペダルを踏み続けることができた。道は傘札から急勾配の登りになっていたが、その後はそれほど急勾配でもなかった。

野尻湖に辿り着くのは、そんなに難しくはなかったが、それから青山学院中等部の二年生たちと一緒にいるためにYMCA キャンプを捜さなくてはならなかった。そこに行く唯一の方法は湖沿いの狭い道を歩くか、湖の回りをぐるりと回るかだった。この方はいかなりの距離があった。それで私はその小道を自転車と一緒に歩き、やつとキャンプに無事辿り着いた。

やつとおもしろい旅ではあったが、終わってほつとした。実際のところ、私は少年たちが着く前に到着していた。彼らが着いた時には雨が降っており、前の日に私がそうだったように、みんなびしょぬれになっていた。そのキャンプで一番思い出すことは、その晩、キャンプファイヤーの回りに座つてひどく蚊に刺されたことだ。

落ちた稲妻

キャンプが終わって、私は電車で軽井沢に戻った。その頃の日本国内の旅で良

かったことの一つは、電車の発車時刻一〇分前に着いたら、自転車を手掌に預けて、降りる時に素早くそれを受け取れたことだ。私も自転車を預けて快速に電車に乗ったのだが、快速すぎて眠りこけ、目が覚めた時には私の給料のほぼ一ヶ月分が入った財布がなくなっていた。

幸いにもキップと自転車の預かり証はもう片方のポケットに入れてあった。駅長と警察に盗難届けを出したが、出てこなかった。外人登録証も入っていたので、警察に届けるのは大切なことだった。

私は数日の間、前の年に招待してくれた家族の所で世話になった。友人と私はかなりの時間をさいて、自転車で辺りを探検してまわった。ある日、私たちは東京方向の道を自転車で行った。一日中交通が激しい今日にそんなことをしたら自殺行為だが、そのころはそうやって下って行くのはなかなか楽しかった。

だが登り道を戻って来るのは重労働だった。自転車がギアが付いていなかったもので、私たちはかなりの時間を歩いたものだ。

この友人宅での訪問を終えて、東京に帰る前に二週間程、前の夏に滞在した寮に行った。そこで友人のシミと彼の学校の多くの生徒たちが、軽井沢に滞在しているのを知った。

ある日のこと、シミは生徒たちと流石にハイキングに行くのに来ないかと誘ってくれた。素晴らしいハイキングではあったが、雲行きがややしくなってきた。帰路、私たちは鉄道の狭い線路と平行して歩いているうちに、稲妻が私たちのすぐ上の変圧器に落ちた。私たちは本能的にあらゆる方向に一斉に走り出したので、見ている人がいたら、驚くべき光景だったろう。誰も怪我はしなかったが、私たちは恐怖におののいていた。その後は無事に帰れただけで幸せといった気分だった。

東京に帰る数日前、私は滞在している寮を出てくれなかつた。日本人が外国人と友好関係を持つのが難しくなってきた時期であり、親しくしていると警察にしつこくつきまわられたのだ。シミによると、ハイキングから帰って来て、村の中心部で別れた時、明らかに刑事だとわかる男が私をつけていたそうだった。それから数ヶ月も、似たような出来事が続いた。

寮を出てから二日間程、私は日本旅館に泊まったが、その後、夫人がアメリカ人の夫妻の所に招待された。私の存在は、彼らがすでに抱えていた以上のトラブルを生み出さなかつたのだ。

軽井沢を去る前のある日のこと、ある若い夫婦が私と数名の人々を、村の中心部の上にある素晴らしい別荘での屋外の朝食に招いてくれた。

アメリカの食事

東京に帰る夜、軽井沢の素敵な家で二人の息子と妹と夏を過ごしていた岡婦人が、数人の友人たちとの夕食に招待してくれた。

岡婦人は冷凍のバナナと葡萄のアイスクリームを用意してくれた。これは本当のホームメイドで、昔は一般的だったがもう見かけないフリーザーのクランクを回すのを、私は大いに楽しんだ。とうとうこしとハンバーガーを食べたから、アイスクリーム・フリーザーが開けられ、私たちの食欲は満たされた。岡婦人はアメリカに住んだことがあるので、アメリカの食事が好きな人たちをどうやって幸福にさせるかをよくご存じだった。

残念ながら、夕食を終えたすぐ後に、九時発の東京行きの電車に乗るためにおいとました。このパーティーには、私が仲良くなった二世の生徒の一人がいた。彼も私と同じ電車に乗って東京に帰ったのだが、その夜東京に着いたら彼の家に泊まるようにと招いてくれた。

真夜中を過ぎて上野駅に着いてから、山の手線で渋谷に着いたのは一時過ぎで、東横線の最終電車を逃してしまつた。それで二時間もかかって歩くはなかつた。ほとんどの道のり、私たちは線路の上を歩いた。一回ほど警官に止められたが彼は私たちの話を信じてくれた。友人の家のある田園調布に着いたのは朝の三時を過ぎていたが、彼の母上が暖かく迎えてくれ、私たちはすぐに床にもぐりこみ眠りについた。

友人のタジがビルマに行つて私が一人だったので、友人のデイビッドとグレイスが彼らの家に招待してくれたので、暫くの間そこに居させてもらった。デイビッドはアメリカで学んだ日本人で、向こうに滞在中にグレイスと結婚したので。実際のところ、彼らはまだこの新居に引越している途中だったので、彼らの手伝いができた。

タジと私が新年のお屠蘇に招待された一家の母上が亡くなった。シミと英子さんが弔問に私も連れて行つてくれた。一室が葬式のために特別に整えられていた。部屋の隅には祭壇があり、送り主の名前のついた花束がそのまわりと上を開んで

いた。祭壇の真ん中には元気で幸福だった時の母上の写真が置かれていた。多くの皇族たちからの御供物も供えられていた。

私たちは順番に祭壇に行き、御辞儀をし、線香に火をともし鉢に置き、折り、またお辞儀をした。その後、別の部屋で豪華な精進料理を頂いたが、これらの間中、ご家族の嘆きは深いと思われたが、日本式で、家族のどなたもそれらしい素振りを見せなかった。

帰国する外国人教師たち

一九四〇年一月、私の存在はすでに余計な負担を掛けているのがはつきりしてきたので、青山学院の外人教師の古顔のE・Tイグルハート先生の招待を受けて、彼の家へ引越した。九人家族用に建てられた家だったが、今は一人住まいだったので、部屋は十分にあった。

一九〇五年に日本にいられたこのイグルハート先生は、日本で子供たちを育てたが、彼以外の家族全員がアメリカに行つてしまひ、その時は一人で住んでいた。彼は親しみを込めてアングル・エドと呼ばれていたが、私が同居するようになったとしても喜んでくださった。センさんという賄いの人がいた。彼女の夫は大使館の料理人だったが、彼女はこの大きな家に付属する小さな家に住んでいた。彼女の夫が時々来ていたが私は会つたことがなかった。

ある晩、スミが能のブライベートな上演に連れて行つてくれた。能について読んだことはあったが、観るのは初めてだった。イギリス大使がゲストだったので、多分彼のためだと思われるが、椅子が用意されていた。それでも初心者の私にとって、能はとてもゆっくりで長く思われた。演じられている劇の内容とその様々の動きの意味に精通していない私のような者にとっては、ついていくのが難しかった。でも雅楽には堪能した。

アメリカの宣教師たちによって始められた青山学院では、まだ多くの宣教師が教えており、普通の教師は私だけであつた。一九四一年の初め、これらの宣教師たちのアメリカ本部が日米間に何が起るかを心配しだして、宣教師たち全てをアメリカに戻すという話があつた。この宣教師たちは戻りたくはなかったのだが、誰もが国際社会では事態が悪化していることに気づき始めていたのだ。

ついに、決定が下されたという言葉と共に、本部から二人の男性がやつて来た。

全ての宣教師が去ることになった。これは青山学院の全ての外国語教師が去らねばならないことを意味した。これは独自に雇用された私には直接の影響がかったが、私の状況もかなり変わるということの意味していた。

前年の秋の立教大学における特別な祝賀の場で、私は終戦後東大の一部になった駒場の一高で教えていたステファン・クラークと会っていた。彼は今まで住んでいた所を出ることになり、住まいを捜すのに苦労していた。彼はアングル・エドに同居させてもらえないかと尋ねた。部屋はまだ十分にあったので、アングル・エドは「いいよ」といい、こうしてステファンが私たちの世帯に加わつた。

この年の青山学院中等部の遠足は、東京湾外側に位置する大島だった。私はとても行きなかったが、帝国海軍が東京湾にいたので、私は参加できないといわれた。生徒たちの中には少なくとも二人位のアメリカ国籍の子供たちがいて、彼らは日本人である前にはるかにアメリカ人だったので、これはおかしなことだった。問題点は、私の外見が明らかに外国人で、私の存在が学校の迷惑になるということの方だった。

春の訪れと共に、外国人教師たちの出国が進行していった。みんなの出国を何回も見送りに行くことを予想して、私は横浜への回数券をまとめて買った。そして夏になる頃には、青山学院のキャンパス内に住んでいた一〇人以上の外国人のうち、残つたのは私一人になってしまつていった。

私たちと一緒に住んでいたステファン・クラークも去つてしまつた。心配しながら滞在するのはつまらないと決めた彼は、代わりに私を一高に推薦してくれた。私の青山学院との二年契約は三月末で終わつていった。延長するようにいわれていたが、日本語を真剣に勉強したかつたので、仕事を半分減らすことで同意していた。しかしながら、日本でも特に優秀な若者たちを教えるチャンスを残して気を変えて、一高でも働くことにした。

軽井沢から遅く帰つてきた晩に泊まらせてくれた二世の友人が、夕食に招いてくれた。楽しかったが、外国人の訪問について近所が口うるさかつたので、彼の母上は、本当は私に来て欲しくなかつたのだと気がついた。友人自身、問題が生じて日本で補まりたくなかつたので、日本の母親とアメリカの父親を説き伏せて、三月末に学年が終了するとすぐに出国した。

彼が出る前に、静岡と清水へのおもしろい旅を一緒にした。私はなぜか静岡県の副知事を知ることになり、この方が清水の近くにある有名な寺に泊まれるよう

に手配してくれた。副知事の高校生の息子も加わり、私たちは日本平へと続く丘の麓にある清水市郊外の寺に伺った。

太平洋の絶景

ご住職は、客人を通す畳の部屋に私たちを心より迎えてくれ、お茶を入れてくださった。彼が部屋にいない間、小さな盆の上に名刺の束があり、その一番上は地元警察の署長のものであるということに気づいた。この頃には、外国人が東京を離れる時には警察に届け方になっていたので、私もこの旅の前にそれをしていただ。私が簡単に見える所にこの名刺を置いて、ここでも警察に見られているんだと示唆してくれたのだろう。けれども私たちが、そこに滞在していた数日の間、ご住職はこのことについて一言もいわれず、できるだけの款待をしてくれた。

その晩、寺の祭壇のすぐ正面の部屋でご住職は自ら用意した夕食をご馳走してくれ、私たちにここで寝るようにといった。それで私たちは押し入れより布団を出して寝る支度をした。その間、地元の農民と思われる男たちが、祭壇のすぐ正面の部屋で何かしらの集まりを開いていた。その様子から、彼らは参拝に来たようではなかった。私たちはとても疲れていたもので、集まりが始まった時には布団に横になっていた。

何を話しているのかを分かるには、私の日本語は不十分だったが、友人が静かに訳してくれた。話しているのは、役人のように、農民たちにこれから大変な時がやって来るだろうといていた。燃料が足りなくなるからそのためにアルコールを作ることが出来るサツマイモを育てるように、またこのことは秘密事だから誰にもいわないように、といていたのだ。私たちは話を全部聞いてしまった。何が行なわれていたかをご住職も確かに知っていたのに、それ以上何も起こらなかった。

翌日、私たちは歩いて市を横断して、松に囲まれた有名な海岸、三保の松原にいった。この美しい松の木の本に近づく、「これは有名な羽衣の物語に出てくる天女が水浴びをしている時に羽衣をかけた木だ」と書かれた標示が目についた。標示の最後には「文部省」とあった。「その木ということになっています」というのではなく「これが確かにそうだ」と示されて、それを文部省が認証していたのだ。

一九四〇年に青山学院が新しい旗さおを運動場に建てたが、その日付が二六〇〇年だったというのを先に話しておくべきだった。つまり伝説上の神武天皇が日本を創造してから二六〇〇年ということだ。その頃は、日本の国の正確な歴史を教えるとした大学教授たちが投獄されていた時代だったのだ。

翌日、私たちは清水と静岡全体そして青々とした太平洋の絶景が眺められる日本平へと登った。寺に戻るとその日が私たちの最終日だったので、住職は特別な部屋で茶の湯に招待してくれ、茶席の客としての受け方を指導してくれた。今でもお茶の煎れ方は何も知らないが、それ以来少なくとも、お茶の受け方と飲み方については自信が持てるようになった。

次の朝、私たちは住職に何かから何までもの親切に心からの感謝を表明し、副知事の息子は静岡に帰り、友人と私は帰京した。

新しい学期が始まると共に、私は青山学院と一高で仕事を始めた。当時の一高の校長は、阿部よししげ（阿部ノウセイ）として知られている。だったが、誰もが暖かく迎えてくれ、居心地よかった。それに私の家からこの新しい職場までは歩いてたったの五分だったので最高だった。

私の夏休みの一部を山荘で過ごさせてくれた太郎という学生が、富士山が望めるので有名な三つ峠への旅にようんでくれた。私たちは新宿から富士吉田への最終列車に乗り込んだが、とても混んでいた。私たちが床に腰を下ろした時にモーニングと縞のズボンの正装の男性が近づいて来て、太郎に名刺を見せた。彼は刑事だった。私たちは手洗いで一緒に行くようにいい、そこで太郎になぜ外国人と旅をし、何処に行くのかと詳細に尋ねた。

この刑事は「今はまあこれでいいが、外国人と一緒に過ごしてはいけない」と太郎にいった。とにかく、私たちが目的の地の近くの駅に無事に着き、真暗闇の中を懐中電灯の助けを借りて歩き出した。最初の幾筋かの朝の光が空に照れ始めた頃、他のかなりの人々と一緒に私たちは山頂に着いた。そして私たちのような登山者相手の小さな食堂でお茶を飲んだ。空が徐々に明るくなり、南東の谷間の向こうに、微かに淡いピンク色に染まった富士山のそびえ立つ輪郭が望めた。こんなにも多くの人たちがなぜ、勇敢にも暗い中を登山をするのが、このすばらしい景観で、瞭然となった。

すっかり朝となって、私たちは食堂で朝食を取り、陽光の中、軒先で少し眠り、山の南側を下がり始めた。半分ほど来ると、お汁粉を売っている男にであつた。

まだかなり寒かったとしてもお腹がすいていたので、いまでもいい思い出として記憶している。やがて我々は誰も人がいない河口湖の湖畔に着いた。そこにボートがあったのでそれに乗り、湖の反対側まで漕いだ。そしてこの辺りにはまだ鉄道が来ていなかったもので、そこから富士吉田まで歩き、そこから電車で乗り帰宅した。

青山学院の新しい生徒の一人はとてもフレンドリーだった。彼の家に招かれたが、彼の父親は新聞に小説を連載している有名な作家だった。その作家は、私が訪問するというので、尺八の名人を招待していた。その作家は私のことを気に入り、してくれたように、次の夏休みの一部を鶴沼で過ごすように勧めてくれた。

アングル・エドの帰国

私がお世話になっていた家のアングル・エドはアメリカに帰る用意をしていた。彼は成人になってからずうっと続けていた仕事を辞めるのを非常に残念がっていたが、妻や子供がアメリカに住んでいたため、そろそろ一緒に住む潮時だと判断したようだ。彼が来る前に、中等部の教師の一人がアングル・エドと私を夕食に招いてくれた。その人の家は東京の外れにあった。この時、大変に楽しいひとときを過ごせて、この教師ともっと親しくなりたいと思ったが、戦争が始まり、彼は戦争に行つたまま帰らぬ人となったようだ。

また青山学院の学長であった笹森博士もアングル・エドと私をディナーに招待してくれた。それまで青山学院で働く外国人教師はみんな彼の家に招かれていたが、この時は有名な中華料理店に招かれた。そのときの食事で、いまでも覚えているのは危険なほど熱い解けた砂糖がかかっている砂糖煮の薩摩芋である。

ついにアングル・エドの帰国する日が来た。彼の永年の功績に謝意を表すため、学校側は生徒たちを彼の家から校門まで整列させた。アングル・エドはこの儀仗兵たちの間を通り抜けてから車にのり、横浜に去ってしまった。

アングル・エドがいなくなった広い家に住むのは私一人となり、六軒の大きな家のある校内に住む外国人も私一人となってしまった。私は太郎と一緒に住まなしかと勧めた。彼はすでに二度も家族の山の別荘に、私を招待してくれていたのだ。この家にはベッドルームが四部屋もあり、余裕は十分すぎるほどあった。

このころ、アメリカ大使館の領事部に用事があって出かけたが、そこで副領事

に傍に来るように呼ばれた。彼は、教師の仕事は大切な仕事なので、日本を離れたほうがよいという警告には従わなくてもよいと、大使がいっているを伝えてくれた。

同じころ日米協会の会合に出席したが、来ていたのはわずかな人数だった。一時期はビジネス・リリーダーや政府の要人が群れをなして集まっていたのだ。

それで思いだしたが、日米協会の会合で徳川公爵の隣に坐ったことがあった。彼は將軍家の跡取りだった。だが、最初誰だか思い出せず、見知らぬ人と会話を始める常套手段で「お国はどこですか？」と聞いてしまったのだ。だが、彼が返事をする前に、私はこの人物が誰であるかを思いだした。そこで思わず笑ってしまい「つまらぬことを聞いてしまつて」といった。ほつとしたことに徳川公爵は全く気にしなかったため、スビーチが始まるまで心のこもった会話をすることができたのだ。

時がたつと共に東京の通りに見られる兵隊の数が増えているようであった。

一九四一年の夏が来たとき、外国人の銀行口座が凍結された。私は銀行口座を設けるほどの持ち合わせもなかったため、直接的影響は全くなかった。だが、事態がますます悪化しているという印象は受けた。

三度目の夏休み

夏休みの最初は鶴沼に出かけた。生徒の父親に招待されていた場所である。家は海のすぐそばにあり、水泳を楽しみ、漁師が地引き網を引いて魚を捕るところを見物した。或る日はお寺にいき参拝し、別の日は江の島に出かけた。

太郎はこの夏も別荘に招待してくれたが、事態が悪化していったので見送ることにした。だが、私は一人で池の平に行くことにした。ここは野尻湖からもそれほど遠くない山の上だ。そこに出かけたのは会合に出席するためだった。その会合には警察のスパイが入り込んでおり、非国民的な言動がないかどうかを監視しているとのことだった。

演説者の一人は尾崎行雄で、彼は日本に議会ができた最初から議員を助めている。彼の演説の内容は覚えていないが、話し方は記憶に残っている。彼の話し方は歌舞伎を思わせたのだ。そこで、昔は歌舞伎のような大袈裟なしゃべり方が当たり前だったのだらうと思ったのだ。

この後、峠井沢のホテルに滞在して数日を過ごした。そして夜になると自転車
を借りて古い友人たちを訪ねた。友人たちは訪問を喜んでくれたが、私を家に泊
める自由はすでに無くなっていると感じていたようだった。そこで私は帰京して
残りの夏を東京で過ごした。

秋の学期が始まり、業務は以前どおり続けられた。青山学院はキリスト教の学
校なので、外国教師の特別扱いはいらない強い方針を保っていた。一方、一高の場
合は教師に好きなことをさせる方針を取っていた。これは生徒に対して同じで、
この生徒は軍事教練に草鞋（わらじ）を履いてきても何もいわれず、注意もさ
れていなかった。

一月三日は明治師であった（現在は文化の日）。この日、私と生徒の一人は
日光に行くことにした。だが、警察に東京を離れるという連絡をするのを忘れて
電車で出かけてしまった。日光に着いてから何キロもある中禅寺湖まで歩いたが、
さらに昔来たことのある奥の湖まで行くことにした。その湖に着いたのは夜だっ
た。しかもすべての旅館は満員で、我々は疲れているうえに、外は寒かった。村
中をさがしては泊れるところがどこにも見つからなかったので、来た道を再び引
き返していたら、一軒の旅館から男が出てきて「今、ちょうど一部屋あいたよ」
と声をかけてくれた。そこで数分の内に我々は心地好い温泉に浸り、おいしい夕
食にありつくことができた。これは本当にラッキーなことであった。

東京に帰ってから一高に教えるに行つたとき、私たちは実に幸運だったことがわ
かった。外国人の同僚の一人もやはり日光に出かけたのだが、警察に通知してい
なかった。彼は電車から降りて、すぐに登山電車に乗ったのだが、その中で刑事
に旅行許可証を見せようといわれたという。彼は許可証が必要だということを知
らなかつたので、そのまま警察に連れていかれ、一日中、コンクリートの床の
上に正座させられたのだ。

この話を聞いて思い当ることがあった。日光から帰るときに切符を買つたの
だが、そのとき窓口の駅員が何かを尋ねてきた。だが、私にはその言葉が理解で
きなかつた。駅員はしばらく躊躇していたが、最終的には決心して切符を売って
くれたのだ。

あるとき私はある生徒と二人で明治神宮のそばを歩いていた。この生徒が英語
を忘れぬようにというので家庭教師を頼まれていた関係だった。そのとき、警察
官がやってきて生徒に「外国人と歩いたりしてはいけない」と注意をした。その

時はそれで終わったので散歩が続いたが、私はだいぶ内心で動揺したことを覚え
ている。

このころ、青山学院は私を学校の理事会のメンバーに選出した。私を選出した
理由は、アメリカとのつながりを保ちたいということであつたので、私としては
断りたかつた。それに私はまだ理事になるには若すぎた。青山学院に来てまだ二
年にしかならなかつたし、この学校を創立し支援し続けていた宗教団体とも、な
んの関係もなかつたからだ。

このような事情があつたにもかかわらず、どうしても理事になるようにと強く
求めたので、私も最後には引受けたのだ。だが戦後はともかく戦前の理事
会には出席した記憶がない。

一九四一年の秋のことだが、私はアンクル・エドから譲り受けた家の裏側に菜
園を造る試みを始めた。育てようとしたほとんどの野菜は虫に食われてしまつた
が、いんげん豆少々と大根を取獲することができた。

アンクル・エドが去つたときに家政婦兼料理人も引き継いだのだが、時の経過
と共に買った物がだんだんと難しくなつてきた。家政婦さんはめつたに肉を見つ
けられなかつたが、魚は豊富だった。パンは手に入らない時期もあつた。

一九四一年二月六日。旧友のスマが立教大学のポール・ラッシュ教授（山の
上の素敵なキャンプに招いてくれた人）と私を夕食に招いてくれた。だされた食
事を見たら、食糧不足があるなんて誰も信じられなかつただろう。

二月七日にはユニオン教会に行った。この教会にはこのところ続けて礼拝に
来ていたのだ。この日、私はスピーチをするように頼まれていた。来ている人は
少なかつた。その場で私は「私たちの将来はすべて神の御手にある。我々が自由
な生活を送れるようにしてくださるに違いない」とスピーチした。

戦争の勃発

一九四一年二月八日。時差の関係で真珠湾攻撃は日本に関する限り、月曜日
に起きた。

朝の六時頃、私の家に住んでいた学生の太郎が私の部屋のドアをノックして、
日本とアメリカの間で戦争が始まつたとラジオがアナウンスしたといつた。私は
前の晩から気分がすぐれなかつたので、次の日に学校へ行くのはよそうと思つて

いた。けれどもこの新しい状況のもとで、私の欠勤が誤解されるかもしれないと思つた。それで起き上がり、支度を始めた。

いつもの時間に朝食を太郎ととつた。彼は日本が真珠湾攻撃にかなりの成功をおさめ、フィリピンとマレーシアも攻撃したといった。官憲がちよつと寄つたが何もいわなかつた。きつと私がまだここにいることを確認したかつたのだろう。

私はいつもの時間に学校へ行き、学生部長の部屋に行った。部長にニュースを聞いたかと尋ねたら、心配しなくてもいいと答えた。これは全くのはつたりだった。日本が真珠湾攻撃をしたニュースを部長が聞いていないことは明白だったが、私がそれをいふ必要もなかつた。そこで、とても気分が悪かつたがクラスに行き授業を行なつた。

そしてどうにかして朝の授業を終え、キャンパスから五分程の所にある自宅に戻つた。非常に気分が優れなかつたので少し横になり、少し食物を胃に入れた。そして食卓に向かつている時に電話が鳴り、午後のクラスは教えなくてもよいといわれた。私ははつとして床に入り眠つた。かなり後で目が覚めてから、軽い夕食を取り、また眠つた。

翌朝の七時頃まだ私が床にいた時、太郎がまたドアをノックして、警官たちが来て私に会いたいといつていた。彼らを案内するように太郎に頼んだら、二人の私腹警官が入つてきた。彼らは突然の訪問を詫言ながら私に一枚の紙を見せた。そこには私が敵国の外国人なので強制収容すると、タイプされてあつた。

そして、私個人の所有物全てを密閉できるタンクスからトランクに入れるようにという指示があつた。収容所で必要な服をスーツケースに入れ三日分の食料も用意するようにとのことであつた。そして警官について行くようにといつた。紙にはさらに後でトランクが私のベッドを取りに来るという説明もあつた。

私は警官に家には三日間分の食料などないので、家政婦さんが買いに行かなくてはならないといつた。彼らが承諾してくれたので、私はその間、持ち物を整理することができた。三時間ほどかかつた。警官たちは「敵性外国人」と書かれた細長い紙を使って、私の持ち物を入れた全てのタンクスやトランクに封をした。私が来て以来、何かと面倒を見てくれたポール尾崎先生が来て見送つてくれた。私は彼に家の鍵とアンクル・エドの金庫の鍵を渡した。これらのことが終わる前に警官がもう二人やつてきた。早い昼食をとつてから、私は皆に別れを告げ、警官二人とタクシーに乗り込んだ。

それは私の青山学院での二年九ヶ月の仕事への悲しい別れだった。だが、それについてよく考えるには、私の肉体的状態が悪すぎた。しかしながら、私が何処へ連れていかれるかは大いに興味のあるところだった。

(翻訳: ウォーラー・神部ちづ子)

まず始めにタクシーは地元の警察署へと向かつた。そこでもう一人のアメリカ人を拾つた。それからタクシーは目黒の方に向かつて西へと走つていった。アメリカンスクールの近くに來た時、この辺が私たちが収容される所ではないかと感じたのだが、車は止ることなく走り続けていった。

ついに私たちは多摩川辺りまで來てしまつた。そして、学校の校庭に入り込んでしまつた。そこは昨日まで、スミレという女子寄宿学校だったのだ。私たちは二階にある大きな畳の部屋へと連れていかれた。そこには他にもアメリカ人が何人かいたが、中には私のよく知つている人もいた。

のちにトランクが着いて、私たちのベッドやスーツケースを降ろしていった。夕暮れにはこの三十六畳もある部屋に一三人が収容された。私たちのベッドが部屋一杯に置かれたものの、さほど狭苦しくは感じなかつた。隣の部屋には二人のベルギー人、ホンジュラス人一人(中央アメリカの共和国)そして五人のドイツ人が収容されていた。

別の部屋には一〇人のイギリス人、廊下の向こうの部屋には五人のカナダ人がいた。彼らはフランススコ修道会神父たちであつた。茶色の修道服に身をこためていた。アメリカ人はいろいろな人たちが集まつていた。先生もいれば宣教師もいたしそしてビジネスマンもいた。驚いたことにイギリス人の中に私の同僚がいたのだ。彼と私は一高で共に英語を教えた仲だった。

お互いに情報交換したり、また面識の無かつた人とは互いに挨拶しあつたりしている内に時間は瞬く間に過ぎていった。皆ベッドの上に座つて話した。夕食の時間になると、今度はベッドとベッドの間に座り込んで、互いに食べ物に分け合つて夕食をすませた。

ポール・ラッシュもいた。彼は昔、山の中にある彼の家に私を招待してくれたこともあるし、つい二日前にはスミの家で夕食を共にした仲であつた。彼がいたお陰で随分私たちは助けられた。というのは彼は我々のよきリーダーとなり、皆

を上手に統制したので、私たちは満足に夕食を食べられたというわけであった。夕食が終わると今度は始めての点呼があった。その時、ここから逃げる事は難しいと思告をうけた。夜九時には消灯となった。そしてドアの鍵はロックされた。「夜中にトイレに行きたいものはドアをノックすること、そうしたら警備の者が部屋から出してくれる」とのことだった。

私たちは東京警視庁の手の中にあるようだった。彼らは収容所の確保とその運営を任されたのだ。彼らはとても厳しく、冗談などとても通用しないと見受けられた。しかし私たちの話かける時は決して乱暴ではなかった。彼らはみんな私服警官であった。彼らの一人は私が先生だと聞いて、それは尊敬の念を持って話かけてくれるのだった。

私たちが収容された建物は、昨日まではカトリックの女子校だった。短時間の内に学校と関係ある物は取り払われたことは明瞭であったが、しかしすべて清潔で整然としていた。建物は二階建てのシンプルな木造建築だった。ほとんどの部屋は畳の部屋であったが、礼拝室が一部屋あった。

私たちのグループにはフランシスコ修道会のカナダ人修道士やイエズス会の神父であるベルギー人がいたのだが、彼らはこの礼拝室を見てホっとしたようだった。私たちアメリカ人とカナダ人修道士を除いては、それぞれの国籍によって部屋に収容されていた。たとえばイギリス人五名が一緒に入れられていたし、ラテン系アメリカ人のグループ、小人数のベルギー人、そしてオーストラリア国籍のロシア人という具合だった。ロシア人には最後に残った小さな部屋が与えられたようだった。

収容所のクリスマス

一九四一年二月一日、私は激しい痛みで苦しんだ。なんとか収容所当局に連絡をとり、聖ルーク病院の医師を呼んでもらうことができた。この病院はアメリカ人宣教師によって設立された病院であったが、その当時は日本人クリスチャンによって運営されていた。そこは私が知っている外国人のほとんどが、必要とあらば行ったところでもあった。ドクター小野という人が現われて、私を診てくれた。彼の診たところによると、化膿性炎症が起って手術を施さなくてはならぬということであった。

二月二日。今日まで、自分たちが持ってきた食料でなんとか賄ってきた。幸いにしてポール・ラッシュのよき指揮があったので、それぞれ上手に補いあい、十分とはいえなくても不足することはない。そしてこの日、初めて日本人から食料の供給があったのである。それは昼食のマカロニだった。しかし期待したほどのものではなかった。

この日、ドクター小野が救急車でやってきた。そして私を聖ルーク病院に連れて行ってくれた。そこに行けるということはなんとも嬉しいことであった。なぜならこの病院は設備は整っているし、スタッフは外国人の扱いに慣れていてからである。痛みはさらにひどくなっていたのだが、私はそこへ行くことで精神的な安らぎさえ感じたのである。

次の日、手術が施され五〇ccの膿がとられた。この苦しみを乗り越えてからは、痛みが全く消え去り、私はただ傷が癒えるのを待つだけであった。私は最良の看護を受けたというべきであろう。私は一日か二日病院に居れば、すんだところを、なんと二週間も入れておくくれたのだ。したがって居心地良い所でクリスマスを過ごすことができた。

どうしたのか私が病気になることが友人たちに伝わったらしい。収容所で別れた友人の奥さんがクリスマスにロースト・ターキーを差し入れてくれたし、コックはアップルパイを送ってくれるし、他の友人からも色々なプレゼントが送られてきた。私が教えた中学校の生徒の一人はリングやクッキーを差し入れてくれた。結果として、私は非常に残念な思いで病院を去り、収容所へと戻ったのであった。

スミレ（我々が収容されていた学校）に戻った日、私はアメリカ人一三人が収容されていた部屋が変わっているのに驚いた。床にはなんとカーペットが敷かれていたのである。それも三六枚の畳をはば覆うことができるような大きなカーペットであった。部屋の真ん中には石炭の燃えているストーブがあった。また廊下の向こうにはドアがあり、なんとその中には紛れもないキッチンがあった。そしてお皿を置く場所があり、いくつかの七輪があった。さらには食料のストックさえあったのである。

さらに驚いたことに、そこには教台の折り畳み式テーブルやレコードプレーヤーまで置かれてあったのだ。これらの設備や食料は収容された仲間の一人の銀行家の要請で、彼の家から警察官の手によって運び込まれたものであった。その中

には石炭やストーブもあったのだ。

また収容所仲間の妻たちはあらゆる種類の差し入れを許可されており、きれいに飾られたクリスマスツリーまであった。したがって、収容所は病院に運ばれた頃よりも大変に住心地がよくなっていたのだ。

聞いたところによると、クリスマスの日には、男たちは一階のキッチンを使用することが許されたそうである。そこではあらゆる設備を使うことができ、彼らは盛大なクリスマス・ディナーをしたそうである。差し入れの中で今だ残っている物に、熱帯の氣候でも腐らないようにと特別包装されたハムの塊が二個あった。それは銀行家からの差し入れだった。

私たちの部屋ではみんなでスケジュールを立てており、夜中に一人が起きてストーブの火を絶やさないように石炭をくべることになっていた。もう一人は六時に起きてコーヒীর用意をするのだ。そうすれば、みんなが点呼す前に起きて来てても間に合うというわけであった。

ポール・ラッシュは天才

私たちの朝食はドアの外にある小さな間に合わせのキッチンで用意された。調理器具は警察官からもらった物もあったが、大抵の道具はすでに持ち合わせていた。昼食になると一階の正式な食堂へと降りて行った。しかし食事がまずいときには、だれも食わずに戻っていた。というのも食事を作るのに不自由しないだけの食糧があったからである。そのなかには、収容所仲間の妻たちが差し入れてくれたケーキやパイもあった。

夕食は例のポール・ラッシュの監督の元で、必ず二階で用意された。ポールは料理が大変に上手で、さらに警察官から必要な物を貰うことに關しては実に素晴らしい手腕を発揮した。

一九四一年一月三十一日、私たちの部屋では盛大なパーティーが行なわれた。お酒もあって飲みたい者はおおいに飲んだ。もちろん夜中過ぎまで楽しんだ。一九四二年一月一日、その日はコックに來なくてもよいと告げ、収容所の様々の国籍をもつ男たちが、自分たちでディナーを用意した。食べきれないほどの食事が用意され、またどれもが実においしかった。ポール・ラッシュは天才だった。

冬が終わるころ、妻たちによるストロベリーの差し入れが始まった。そこで大

きなポールを手に入れ、毎週、生クリームを貰えるように手配した。生クリームをたっぷり載せた大きなストロベリー・ショートケーキが、食べられるようになったのだ。(ケーキは火鉢の上で焼かれた)。

後に私は一人でケーキを作ることもあった。その時は三段重ねのチョコレイトケーキを作った。まず一枚ずつ七輪でケーキを焼き、例の銀行家が家政婦から入手したファッジ(砂糖・ミルク・バター・チョコレイトに香料を入れて柔らかく作ったキャンデー)を中に挟んで、全体をマシュマロ・フロスティングでカバーしたのだ。生クリームが欲しい者にはもちろんケーキの上になつぷりとのせてやった。

日曜日には礼拝室がよく利用された。カトリック教徒は早朝にミサを行なった。その時はプロテスタント信者たちが賛美歌を歌ってあげるのである。そのミサが終わると次にはプロテスタントの宣教師が礼拝を行なうという具合である。

数週間後のことである。それまでは夜になると部屋に鍵がかけられていたが、それがなくなった。そして一階の大きな部屋には卓球台が備え付けられた。卓球はとても人気があった。卓球トーナメントまで行なわれるようになった。ついに警備の警察官がトーナメントのことを聞いて、自分たちも入れて欲しいと申しでできたのだ。

トーナメントの日、最後まで勝ち進んだのは、茶色の修道服に身を包んだフランススコ修道士と警察服を着た警察官であった。誰もが最終戦を親に來たが、応援あり叫びありのそれはすごい盛り上がりだった。捕虜の身である私たちには大変嬉しいことに優勝者は修道士であった。

数人集まって、私たちは合唱団を結成した。練習もして、コンサートも準備した。幸運にもオーストラリア国籍のロシア人が作曲家だったので、彼が特別に収容所の歌を作ってくれた。その歌というのはこういう歌詞だった。

生きようが死のうがあの門をくぐってみよう
そこには牢獄への門と書いてある

と、このように続くのであるが、警察官がどんな歌なのかと尋ねてきた。審査の結果、この最初の二行は問題だがあとはよしということだった。「お前達はこので死ぬのではない。ここは牢獄ではない」と彼らはいうのだ。そこで私たちは

は最初の二行を次のように変更して歌った。

生きて生きて、あの門をくぐろう

そこには僕らの現世への門と書いてある

ともかくコンサートは成功に終わった。それは収容所での退屈な生活に変化を与えたからだ。

ある日、家に手紙を出すことが許可されるかもしれないといわれた。おそらく赤十字を通してということであった。私たちはまず手紙の下書きを提出してから、そのコピーを送るのである。私が手紙に「収容所の窓からは、富士山が見える」と書いたら、それは却下された。そのようなことを書いたら、収容所の場所がわかるからだそうだった。しかし実際には富士山は遠く六〇マイル離れた所からでも見えるのであった。それはともかくとして、それらの手紙は相手に届くことはなかった。

捕虜となって六週間が過ぎたある日、スイス大使館の代表が収容所に来た。彼は神父でヒルデブランドという名前だった。大使館の方は様々な国との外交に忙しく、よって神父がこの仕事を手伝っていたのだ。「視察のためにやってきたので、何か問題があればいつてほしい」と彼はいった。アメリカ人の私たちは彼が来てくれたので内心ホッとしたものだ。私たちのことは忘れられてはいないのだ。政府は私たちに何が起きているのか知りたいのだ。彼はまた本も数冊持ってきてくれると約束した。神父は定期的に訪問するようにになり、外の世界ともつながりがあるのだという感じを得ることができた。

他の進展もあった。それは月に一度の面会が許されたことだ。私は最初の面会人としてアメリカ人の妻を持つ友人をお願いした。アメリカ人の妻を持っていることで、色々と困難があっただろうが、私と会っても彼にとってさして迷惑にはならないと思ったからだ。彼はやってきてくれた。

傍に英語ほどの程度わかるのかははっきりしなかったが、話を聞いている人がいたのだが、それでも話しは弾んだ。このような面会は私が交換船につけて日本を待つまで続けられた。約二年間である。この面会があったお陰で精神的に随分と助けられたものだ。

一九四二年四月一日の朝早く、空襲警報がなった。後に私たちが昼食に降り

ようとした時、今度は攻撃の警報が鳴り響いた。といっても私たちはこういう時に何をしろという命令もなかったもので、いつものように食事をとった。部屋に戻ってスナックを食べたが、みんなただ黙っているだけだった。

突然、対空砲撃の音がパチパチとなって、そして爆発音がした。窓の外にはアメリカ軍の飛行機が見えた。飛行機は突然低空飛行をとったので、撃墜されたのかと思ったが、単に回避行動を取ったのに過ぎなかったようだった。飛行機は再び姿を現し、富士山の方向へ向かって見えなくなるまで飛んでいったのだ。

その後数週間の間に、アメリカ軍によって、かなりの被害が町のあちこちにあったということを、面会者から知らされた。

第一回目の交換船

春になって、捕虜を交換する船の話があった。だが、学校の幹部であった友人が面会に来て、先生の職業にあつて、今回の交換船に乗らない者は捕虜の身を解かれ、再び教鞭を取れるという話をしてくれた。そこで私は留まる決心をした。後で私はその決心を後悔したが、その時はそういう情報があったのだから仕方がなかった。

船の件については、その後何度も延期され、実現など決してしないのではないかと思われた。そんなある日アメリカ人の新聞特派員が五名ほど監獄から収容所へと送られてきた。彼らは、日本に敵対する情報をアメリカへ流したとして、逮捕されたのである。だが戦前の法律はかなりあいまいなもので、どんなニュースでも警察に都合よく解釈されて逮捕されただろう。

彼らは半年もの間、訊問される時以外はたった一人で監禁されたのだった。話すことに飢えていた彼らは、一晩中話し続けた。虐待などは受けなかったようだが、しかし彼らは憤慨していた。ここへ来る前に特別な昼食に接待され、監獄では良い待遇を受けたと記事に書くよう強要されたそうである。

もし従わなかったら、恐ろしいことになると思い、みんななにかを書いたそうである。しかしわざと極端に誇大に書いて、だれも信じられないようにし、プロバガンダにも使えない代物を書いたといっていた。

数日後、最初の交換船のことを知らされた。それはアメリカ人はじめ他の敵国人を母国に戻し、そのかわりにアメリカで収容されている日本人を日本に送ると

いうものだった。

六月十七日にやっと第一船が出港した。私たちの収容所からは一五名のアメリカ人と数名の外国人が去って行った。後に残ったのは私を含めてわずかだった。

出発の前の晩のことである。長期保存のために特別に包装された例のハムを開け、私たちはハムステーキを夕食で食べた。そのハムはアメリカ人銀行家からの差し入れであった。実に素晴らしい夕食であった。

後日、その夜を共にしたアメリカ人ジャーナリストが書いた雑誌を読む機会があったが、記事は、収容所では飢えていたと書いてあった。後日、アメリカでたまたま彼に会う機会があったのでその雑誌の件を話してみたことがある。彼の返事は冷笑的だった。「編集者というのは奇妙なことを要求するんだよ……」といったが、嘘を書いて記事を書いた言い訳としか、聞こえなかった。

彼らの船が出港して後に、今度は二人の船長を含む、七人のギリシャ人船員が私たちの仲間となった。そしてもっと多くの外国人が収容されてくるという噂があった。

一九四二年八月二十九日。収容所に二度目の交換船の知らせが届いた。リストには名前が書かれてあり、その船は九月二日に出発とのことだった。その中になんと私の名前があった。私は急いで自分の持ち物の荷作りをした。

八月三十一日。必要な買い物があるならば、町に出てよいという許可があった。町から警察官がきて私に同行するということだったが、しかし警察官など誰も現われはしなかった。そこで私は一人で外出するようにといわれた。もちろん逃げる誘惑にはかられなかった、どこにも逃げて行く場所などなかったからだ。

私は最寄りの駅まで歩き、繁華街へ行く電車に乗った。家に持ち帰るのに何かいいものが買えないかと思ったので、帝国ホテルにあるアーケードに行ってみることにした。お金はあるまい持っていないが、しかしこれくらいのお金ではアメリカでもたいした物は買えないのだから使ってしまうおうと思った。

アーケードの中にある時計屋に入って時計を見せってもらうことにした。ところが、店の人は「すみません。今は時計が一つもないのです。午後には入荷するのですが」といって謝ってきた。しかたなく、午後にもまた戻ってみると。なんと彼は町中捜し回って私が買えそうな時計を見つけておいてくれたのだった。その時計はかなり安かった。

普通、時計の価格は政府によって決められているのでこんなに安いはずがない

のである。それで、面倒をかけた分も払いたいといったのだが、彼らは「そのようなお金は頂けない」と断るのであった。ただ彼らは「申し訳ない。もっとお安くできればよいのですが……」といった謝るのみだった。私がアメリカ人で敵国人なのに、彼らはこのような態度をとったのだ。

次にアーケードにあるシルクの店に行ってみた。そこでは買えそうな手頃なシルクのシャツとネクタイをみつけた。衣服の販売には規制があったため、店の人は私の名前と住所を聞いてきた。そこで自分の名前と収容所の住所を書いて渡したところ、その店員は「たいへんです」と申し訳けなさそうに私のことを気遣ってくれた。そして喜んでその商品を売ってくれた。ちょうどその時、一人の日本人が私の後ろから来て、似たような品物を購入しようとした。だが、その日本人は「これらは外国人用です」といわれ、買うことができなかったのだ！

次の日は九月一日だった。私は荷作りもすべて終わり、出発を待つのみとなった。しかし、なんと延期という知らせが入ってきたのだ。九月三日(金)にスイス大使館のヒルデブランド神父が収容所にやってきた。そして私たちに「もう船はないかもしれない」といった。私はその時、彼に「いつでもかまわないうから、船が出る時は私を乗せて欲しい」とお願いした。

九月十六日。数人の年配いたアメリカ人男性と女性たちが収容所にやってきた。彼らは今まで収容されていなかったのである。そこで私たち男どもはみな一階の部屋に押し込められ、女性たちはみな二階の部屋に収容された。そして一階と二階との階段には横がたてられた。私たちは二階にいる女性たちと話すことは一切許されなかった。たとえ奥さんが二階にいても会話ができなかったのだ。彼らは交換船が一年後に出港した時まで、お互い話もできなかったのである。

二階に収容された女性たちの中で一人の若い子を私は知っていたので、彼女に一度声を掛けたいと思った。男たちは運動不足解消のため、毎日広場で体操などをやらされていたが、二階の窓を見ることさえ許されていなかった。見てもしようものなら、後が大変であった。しかし私はいくことを思いついたのだ。次に体操で外に出たときに、私は決して上を見ることなく、地面に向かって彼女の名前を叫んだのである。数回叫んだら彼女が気づいたらしい。彼女の声が上の方から聞こえてきた。この方法で、私たちは捕まえることもなく、かなりの話しができたのだ。

私たちのグループにいる数人のカトリック神父だけは二階の礼拝室でミサを行

なうことが許されていた。しかし女性たちの部屋のドアには鍵が掛けられおり、礼拝室に入ることは許されなかった。でも彼女たちはドアの外からでもミサが聞こえるのに気づきミサに参加した。そして罪の告白をドアに向かってささやいたのだ。よって、神父もドアの向こうから彼女たちの告白を聞いてやる事ができた。

北浦和の収容所

だが、このような収容所での状態は数週間しか続かなかった。一九四二年一月五日、男たちはみんな東京の北にある北浦和へと移されたのである。そこはフランススコ修道会の修練院であった。自由に歩き回れる大きな庭があり、今までいた所に比べると環境はずっと良かった。

しかしながら、その警察官の態度は監視庁の警察官とはかなり違っていた。監視庁の方は、国際的な収容キャンプに関する条約に関する知識があったので、私たちが不当な扱を受けなかったのだ。(ただし例外もあった。それは日本の占領下にあったアルシヤン列島の二つの島がアメリカ軍によつて陥落した時であった。その時多くの日本人が自殺したのだ。そのため彼らの感情は高まり私たちは怒鳴られた)。

北浦和では地元警察の管轄であったためか、彼らは私たちを犯罪人として扱った。彼らは毎日のように怒鳴り、特に格別の不愉快な警察官はいつもわめき立てていた。そしてフランススコ修道会が育てていたさつまいもを掘り起こすことが私たちの日課とされた。そのさつまいもは警察官たちが持つて行くのである。

我々の多くにとって、警官に盗まれる前に、盗みをするのが正当だと感じた珍しい時期だったといえるだろう。また汚物のタンクを運ぶのも仕事の一つだった。大勢が収容されているので、タンクは瞬く間に一杯になった。そしてその汚物は畑に撒かれた。

不当に扱われるのは耐えがたいことだったので、ヒルデブランド神父が訪れてくれる時に、自分たちの気持ちを訴えてみることにした。スイス大使館の車に乗って彼が現われた時、地元の警察官たちはいったい何がおこっているのか分からなかったようだ。赤十字からの訪問だと思ったのかもしれない。赤と白が逆さになってるスイスの旗を、赤十字の旗と間違えたようであった。

外務省から英語のわかる男性が一人、神父と共にやってきていた。彼は、神父に不平などが伝わらないように監視する役目をもっていたようだ。だが、彼はアメリカの大学を出ていたので、我々と喜んで英語で話した。その間にフランス人、カナダ人あるいはフランススコ修道士がフランス語で神父に不平不満をぶちまけていたのだ。

何が起るかわからなかったが、数日後、神父と話をした修道士が収容所の幹部に呼び出された。収容所のことを悪くいったということで、彼はその警察官の前に座らされてひどく責められた。とうとう警察官は怒り狂い、かんしゃくを起こして、テンプルの下からその修道士のすねを蹴った。運良くというるか、日本のしきたりに従つて建物の中ではみな靴をぬいでいたので、怪我などはなかった。しかし事件が起きたのは確かであった。

間もなく、その幹部はどこかへいなくなつてしまった。グループの一人が、収容所に配達される日本の新聞を読んで分かったことだが、その幹部は田舎の町に転属されたそうだった。

代わりに、すでに退職した年配の警察官がやってきた。彼は昔風の紳士だった。そしていい人だった。いつも怒鳴っていた警察官もどこかへ姿を消していた。そしてさつまいもを掘る替わりに、畑仕事の色々な道具や野菜の種などが与えられた。

あるフランススコ修道士はとても熱心で、大きなキャベツを育てるのに冬中精をだしていた。毎日彼は自分の手で害虫を取り除いていた。その結果、私は素晴らしい育ったキャベツを一人で食べることができたのだ。ルームメイトは生のキャベツを食べながらうたったのだ。そしてバレーボールもできるようにもなり、収容所の雰囲気はがらりと変わったのである。

一九四二年二月二〇日。仙台方面から男たちが収容されてきた。なんと全員で六三人も収容されることになったわけだ。そのうち三六人はカトリック神父たちであった。(ドミニコ修道会、フランススコ修道会、イエズス会)だが、この収容所はもととカトリック修練院であったため、礼拝堂があったので、神父たちは毎日ミサを行なうことができた。ワインは貴重品で、一滴を大切にしていた。また聖餐(さん)用の薄いパンの破片も満足になく、それ以上の供給も望めなかったが、ミサは行なわれた。

一九四二年のクリスマスは荒涼としたものだった。戦争はすでに一年以上も続

いていた。日本はあらゆる地域に進軍していて、終戦の兆しはなかった。でも私たちはささやかなクリスマスマスパーティーを開いた。簡単にサンドイッチでも作るようにと責任者の警察官がパンを持ってきてくれたのだ。そのパーティーではクリスマスキャロルを歌っただけで、みんな部屋へと解散した。もちろん午前中にはカトリック神父たちによって、威厳のあるミサが行なわれた。

粗末な食事

一九四三年元旦。今度の新しい役人は皆で一緒に新年を祝おうと酒を出してくれた。交換船の話は進展もなかったので、私たちは時間をつぶすことを考えて生活していた。最初の収容所で、私は日本語の勉強をして日本語で日記をつけていた。そして分らない所はその管理者におおしてもらっていた。しかし今度の収容所に来てから、別に日本語を続けなければならない理由もなかったで、イエスズ会の神父にラテン語とギリシア語を教えてくれるよう依頼した。ラテン語もギリシア語も、高校時代または大学時代に習ったことはあった。彼はなかなか語学が達者だった。そんなに一生懸命に勉強したとはいえないが、この興味深い神父と親しくなったことは良いことであった。

バレーボールの試合もよくした。庭はかなり広くて、歩いて運動不足を解消したりもした。もうひとつ、時間をつぶすよい方法は、木の切り株を掘ることだった。それらの掘りだした木で午後のお茶をわかしらしたのだ。

東京の収容所にいるときには、友達や親戚から食料を差し入れてもらうのが恒例となっていたが、北浦和はかなり離れた所にあるため、差し入れはめったになかった。また差し入れをしてくれる友人をもった者はみんな船に乗って国に帰ってしまった。したがって警察から与えられた食料が重要なものとなってきた。食料はやつと足ったところだった。一年後にアメリカに帰ったとき、さほど体重は減ってはいなかったが、歯の状態がかなり悪化していた。おそらく粗末な食事のせいだろうと私は思っている。

毎朝、リング半分か小さなみかん一つ、あるいはなにがしかの果物が出た。ほとんどの者はリングの皮をむいていたが、私は恥じらいもなく後でその皮を集めては洗って食べたものだ。(現在の日本ではたくさんさんの農薬を使用しているので、地元大学の農学部忠告に従い、今は私も皮を剥くことにしている)。食事に

される肉についても疑惑を持ったものだ。時には奇妙なほど柔らかかったのだ、猫かそれに似た動物ではないかと思ったりもした。しかし日本人よりも私たちのほうがいいものを食べていたのはまちがいないかっただろう。

一九四三年二月。予期せぬところから補助の食料が届いた。赤十字が日本に収容されている人々のために、第一回交換船に食料を積んで送ってくれたのだ。記憶によればその主な食料というのは、乾燥した西洋梨であった。それはかなりの量だった。またバチカンからスバゲティも届けられていた。食料に飢えている私たちに本当に有り難いことだった。

最初の交換船が出てから二度目の船が発航するまでの間、みんな虫歯に悩まされた。浦和にある地元の歯医者にグループごとに行けるようになったが、もちろん警察官同行であった。だが、外に出れるのは実に嬉しかった。私には大きな虫歯があって、医者は抜いたほうが良いといったが、一時的に詰め物を入れて欲しいとお願いした。その親切な医者は私のいう通りにしてくれた。その歯はアメリカに戻ってくるまで大丈夫だったし、治療した結果、今でも抜かないですんでいる。時と共に私の服はぼろぼろになってしまっていた。特に冬のウールのソックスはひどかった。どうにかして色々な色の余り毛糸を手に入れたので、自分で繕っては履いていたが、度を重ねるごとに色とりどりになり、皮肉にも美しくさえていった。

北浦和は冬になると寒かったが、暖房はなかった。だから前の収容所にあった石炭のストーブが恋しかった。私の寝具といえば粗末なものであった。そこで二枚の毛布をそれぞれ三つにたたみ、袋になるように縫った。袋の中にまた袋という具合に縫うと、身体の上下に三枚の毛布が掛けられるようになる。しかし出たり入ったりするのによつたかなのものであった。もし火事でも起きていたらどうなっていたらだろうか。

友人の一人が倉庫からベッドを手に入れ運んできた。不運にもそのベッドにはナンキンムシが住み付いていたのだ。ナンキンムシは瞬く間に部屋中に広がっていった。それでナンキンムシを殺すのが私たちの毎晩の日課となったが、噛まれない日は数えるほどしかなかった。アメリカにもどってくる時、ナンキンムシまで荷物と一緒に持ち帰ったのではないかと、非常に心配したが、幸いなことにその後一匹も見つからなかった。

待ちに待った時

フランススコ修道会、ドミニコ修道会そしてイエスズ会の神父たちとは色々興味深い会話をかわした。昔、学校で学んだ彼らの歴史的ライバル関係は、遠く離れた日本においても存在していた。

フランススコ修道会にいわせると、ドミニコ修道会の神学は本道から外れているという。

一方、ドミニコ修道会はフランススコ修道会より優れていると思ひ、イエスズ会を嫌っていた。ドミニコ修道会にいわせると、イエスズ会にはトマス・アクイナス（ドミニコ修道会の有名な神学者）の教えに聞して教えているだけだというのだ。それはカトリック教会の公式な信条だが、ドミニコ会は真実に聞して教えるのではなく、真実そのものを教えるのだという。

一方、イエスズ会士は彼らを見下しており全く相手にしようとしなかった。

戦争は時と共に悪化していった。日本の新聞が手に入っていたので、読める者は読んでいたし、またラジオで情報を得ることもできた。ある日のラジオは、大嘘つきのルーズベルト大統領が「ミッドウェイ海戦が戦争における転換点である」といったと報道し、さらにアメリカ艦隊のほとんどが沈没したと伝えた。だが次の日の新聞には経済界が悲観的になっていると書かれてあったので、私たちはルーズベルトが真実を述べていることを悟った。そして帰国したときに、我々の見方が正しかったことが判明した。

そして新聞では毎日、南方の島における帝国陸軍のはなはしない勝利を伝えていた。しかしながら前に出た地図と比べてみると、前進ではなくて後退していたことが明らかだった。このように情報を解釈していたので、一九四三年末にアメリカへ戻っても、新たな戦争について学んだことはそれほどなかった。

長い冬がすぎて、春も過ぎて一九四三年の夏になった。八月二十五日のラジオ放送で次の交換船が出港すると伝えられた。数日後にはヒルデブラント神父がやってきて、船のことは本当だと教えてくれた。待ちに待った時がやってきたのだ。そしてついにそのリストの中に私の名前があった！

日本に残る者が天命と信じる数人の神父と日本人を妻に持った数人以外は、ほとんど全員が帰国することになった。ヒルデブラント神父は皆のパスポートを集め、日本を発つ寸前には、スイス大使館発行の保護パスポートも渡してくれた。

荷物といつてもたいした物は何もなかった。そしてコレラの予防注射を行なった。何人も同じ注射針でコレラの予防注射を受けたが、有り難いことにその当時はエイズがなかったのが助かった。

ついに九月一日が来た。私たちは荷物を抱えて駅まで歩き、そこから横浜行きの電車に乗った。横浜につくと今度は警察の護衛車に乗せられて港まで出た。そこにはフランスから捕獲した船が私たちを待っていた。その船の船首には東亜丸という新しい名前がついていた。

戦前における日本滞在の報告書なのでここまでにしたと思う。しかし最後に、この航海の経由を付け加えておこう。九月一日（私の誕生日）の真夜中過ぎに出港した船は、神戸、シャンハイ、ホンコン、サンフェルナンド（フィリピン）、サイゴン、ゴア（今のインド）、ポートエリザベス（南アフリカ）、リオデジャネイロを経由して、一九四三年二月一日にニューヨークに到着したのであった。

（翻訳・波多野一恵）

追想

日本に滞在した間、多くの素晴らしい人々に出会った。毎日の経験はきわめて興味深く、満足できるものだったが、それは非常に異なった文化を学ぶ喜びのせいであつた。だが同時に、いつまでも経ってもこの国の一面にしか触れていないのではないかという危機を感じていた。ときどき、日本にはおほろげにしか知ることのできない側面があることを感じさせられたのだ。

一番、心にひびきかかったのは、日本を動かす真の力は表面にはでておらず、裏の世界にあることに気がついたことだった。この裏の力を見ることができず、ただ僕測するほかなかった。

私が日本に来る前に、軍部の過激分子が二度はビクターを起こし、国を乗っ取るうとした。だがこれらの試みは鎮圧され、文民統制が行なわれているのは明瞭だった。だが、多くの大臣たちが暗殺されていた。私が日本に来たのは一九三九年の三月だったが、その数年前には有名な二・二六事件が起きており、多くの政府の指導者たちが暗殺されていた。当時の首相は助かったが、それは暗殺者たちが人違いをしたせいであつた。

私が日本に居た間、誰かが・あるいは・あるグループが国を乗っ取り、軍部の力を利用して新帝国を創りだそうとしているのは明らかだった。大帝國になるのだという考え方はすでに当時の日本で市民権を得ており、日本はシンブルに「日本」とは呼ばれなくなっていた。郵便の切手にすら「大日本帝國郵便」と印刷されていたのだ。

すべての学校は、ミッション・スクールであっても、小学校六年生から軍事教練が必修であった。さらにすべての学校は、生徒と教師の代表を神社に送り、お参りさせねばならなかった。日本政府は、神社は単に国の記念碑で、お参りに宗教的な意味はないと説明していたが、宗教団体などがこの理屈を受け入れるには、非常に複雑な屈理屈をこねまわさねばならなかった。

当時の明治憲法によると、陸軍も海軍も国民によって選ばれた議会の支配下には無かった。天皇の直接指揮下に置かれていたのだ。したがって陸海軍が満足しないと、内閣が組閣できない状態だった。

当時知り合った青年たちの何人かは、裏で糸を操っている神秘的な人物が存在し、その黒幕が日本を戦争に追いやっていく、という噂があるといっていた。だが他の多くの知識人たちはこの噂を否定した。だが現実起こっている事件を見ると、日本は独裁者なしの独裁国のように動いてると感じたし、またそういう感想も述べたものだった。

五〇年経った時点で昔を振り返ってみると、一人の人物が糸を操っていたのではなく、一つの思想が人々の心に浸透し、この思想に心酔した多くの個人が色々な場面で日本を戦争に追いやってたように思われる。日本には強烈な中央集権的な指導者がおらず、一方、普通の日本人は独目の深い信念といったものを持っていない。そのためその後はクーデターを起こさなくても、この思想が完全に日本を支配することが可能だったように思える。

戦前に物事がこのように起こるのを目撃したが、戦後の日本社会の機構も基本的にまったく変わっていないことを感じる。したがってこの日記の最初に、戦前に感じたのと同じような、不安な雰囲気を感じると述べたのだ。

一九三一年頃から日本の帝國陸軍は、中国で独自の行動を取っていたようである。満州は併合され、中国の他の地方も徐々に支配下に置かれ始めた。当時の日本のいい分は、日本を共産主義から守るということであった。だが、郵便切手に大日本帝國と印刷されていたと同じ思想で、軍部は大帝國を創ろうとしていたよ

うに思われる。

当時、私は中国からアメリカに引き上げるアメリカ人と、ときどき接触する機会があった。彼らは帰国の途中に日本に立ち寄ったのだ。彼らは中国において日本の陸軍が何をやっているかを観察して、その話を聞かせてくれた。その話を聞くと、私が毎日会って、一緒に働いていた愛すべき日本人たちには、全く別の一面があることを悟らざるを得なかった。そして、その別の顔は、引き続いて発生した全面戦争でペールを説くこととなった。

したがって、強制収容所に収監されている間も、もしも日本の状態が徹底的に悪化したら、我々はどう扱かれるのだろうか、と、考えたものだった。したがって交換船に乗り込んだときは、心底から安堵した。

それではなぜ、戦後も長い年月、日本に滞在したのでろうか？

第一に、長いこと日本に住まいだに多くの素晴らしい日本人にめぐり会えたことがある。

第二に、どこの国にも色々な側面があり、色々な奔流が流れていることを理解したのだ。その辺りの事情に関しては、日本も他の国々もあまり変わらないことに気づいたのだ。

日本も他の国と同様に徐々に変化している。もしも私の影響がわずかでもあり、日本が個人の確信と責任を基礎とした真の民主主義に少しでも近づくことになったなら、私がこの国に長く滞在した年月にも意味があったことになるだろう。

(翻訳：波多野三郎)

翻訳者から

ハーカー先生の叙職が決まり、来日予定が決定してから、ウオーラー・神部ちづ子が、急遽、友人たちに呼びかけてこの翻訳が実行された。

翻訳は八名の手で突貫工事で行なわれたが、最終的な文体の統一は波多野が行なった。

翻訳した八人それぞれが最善を尽くしたのだが、正しい漢字名がわからなかつ

たり、戦前の事柄にも疎く、表現に関しても不十分なところがあるかもしれない。気がついたところがあれば、ぜひご指摘、ご教授して欲しいと思う。

なお、今回の翻訳はハーカー先生を敬愛する元生徒たちを中心とするボランティアによって行なわれたわけだが、翻訳に慣れている人ばかりではなかった。ただ、ハーカー先生のご恩にお礼の心を表せるならば、「力不足かもしれないがぜひ協力したい」という気持で翻訳に取り組んだしだいである。

今回翻訳したのは戦前の日記だが、実は戦後の日記も存在する。一九四六年に再来日してから一九五二年までの日記は、すでに英文では完成している。またそれ以降の日記も進行中と聞いているが、いつか、それらの日記も翻訳できたらと思う。

この翻訳をするにあたってなにかと励ましてくれたMRAハウスの中山専務理事にも、翻訳者一同、感謝の意を表したいと思う。

(翻訳者を代表して：波多野)